

# 鳥取県

令和  
**4**  
年度版

## 海洋環境・水産資源レポート

これ一冊で鳥取の海と魚が  
どうなっているかわかります！

### 鳥取の海の幸をいつまでも漁獲するために

クロマグロ資源が回復傾向  
100kg超の大型個体が多く水揚げされる



磯場の藻場を守るためボランティアダイバー  
と連携したウニ駆除活動を実施中



3年続けて好漁となっているマイワシ  
変動が激しい資源動向をモニタリング



境港でアオナマコの資源管理を実施中  
小型個体を保護し、単価も向上



鳥取県水産試験場  
鳥取県栽培漁業センター

# 目次

	2022年を振り返ってみると	……1
	トピック	
	・ 天然ムラサキウニの成熟変化について ～美味しい時期はいつ？～	……3
	・ 鳥取県漁協酒津支所が「砂抜きサザエ」の出荷を開始	……4
	・ 境港のアオナマコ資源管理 ～資源を計画的に利用するには？～	……5
	・ ハタハタの2023年春漁の深刻な不漁について	……6
	鳥取の港	
第1章	・ 沖合漁業の港	……7
	・ 沿岸漁業の港	……8
	海洋環境	
第2章	・ 鳥取沖の海の特徴	……9
	・ 鳥取沖調査海域の水温変化	……11
	・ 鳥取沿岸の水温、潮流変化	……12
	・ 美保湾の表層水温等の旬別変化	……14
	水産資源	
第3章	まき網漁業の概要	……15
	・ マアジ	……17
	・ マサバ	……19
	・ カタクチイワシ	……21
	・ マイワシ	……23
	・ ブリ	……25
	・ クロマグロ	……27
	イカ釣り漁業の概要	……29
	・ スルメイカ	……30
	・ ケンサキイカ	……32
	沖合底びき網漁業の概要	……34
	・ ズワイガニ	……36
	・ アカガレイ	……38
	・ ソウハチ	……40
	・ ハタハタ	……42
	べにずわいかご漁業の概要	……44
	・ ベニズワイ	……45
	沿岸漁業の概要	……47
	・ ヒラメ	……49
	・ サワラ	……51
	・ マダイ	……53
	・ ナガレメイタガレイ	……55
	・ キジハタ	……57
	・ ソデイカ	……59
	・ サザエ	……60
	・ クロアワビ・メガイアワビ	……61
	・ イワガキ	……62
	・ バイ	……63
	・ アカナマコ・マナマコ	……64
	水産試験場と栽培漁業センターの取り組み方針	……65

## 2022年を振り返ってみると

・鳥取県沖調査海域の水温変化

2月～5月まで平年並みに推移した後、6月～9月は平年より高めの水温を示しました。11月は再度平年並みに推移し、12月は平年より高めの水温を示しました。7月の0m深は平年値との差異が最も高くなり、平年よりはなはだ高い水温となりました。

・鳥取県沿岸域の水温、潮流変化

表面水温は、夏季（特に7月）平年より高めに推移しました。御崎沖の潮流は、東西方向に流向が激しく変動する流れが認められました。

夏季の水温が  
平年より高めに推移

詳しくは11～12ページをご覧ください

### 赤潮・エチゼンクラゲ

2022年は有害赤潮（コクロディニウム・ポリクリコイデイス及びカレニア・ミキモトイ）は確認されませんでした。

また、漁業被害が生じるほどのエチゼンクラゲの来遊は見られませんでした。

### 主な漁獲動向

#### まき網漁業

- 😊 マアジの漁獲量は増加
- 😞 マイワシは横ばい
- 😊 クロマグロは増加
- 😞 ブリは横ばい

#### イカ釣り漁業

- 😞 スルメイカの境港水揚量は低水準
- 😞 ブドウイカは減少

#### 沖合底びき網漁業

- 😞 ズワイガニは横ばい
- 😞 アカガレイは横ばい
- 😞 ソウハチは横ばい
- 😞 ハタハタは横ばい

#### べにずわいかご網漁業

- 😞 ベニズワイの漁獲量は横ばい

#### 沿岸漁業

- 😞 サワラは減少
- 😞 ヒラメは減少
- 😞 マダイは横ばい
- 😞 キジハタは減少
- 😞 ソデイカは減少
- 😞 サザエは横ばい
- 😞 アワビは減少
- 😊 イワガキは増加
- 😞 バイは減少
- 😞 アカナマコ・マナマコは横ばい

詳しくは、2、15～63ページをご覧ください

# 2022年を振り返ってみると

## 資源状況、漁獲評価

各魚種の国による資源評価及び、本県の漁獲評価については下表の通りです。

【下表の凡例】

セルの色	説明	矢印の色	説明	矢印の向き	説明
緑	漁獲圧・親魚量共にMSY達成の水準以上	緑	高位	↗	増加
黄	どちらか一方がMSY達成の水準以上	黄	中位	→	横ばい
赤	漁獲圧・親魚量共にMSY達成の水準未満	赤	低位	↘	減少

魚種	系群	国による資源評価 最大持続生産量(MSY) を実現する値に対する状況		県による 漁獲評価 水準・動向	
		漁獲圧 (括弧内は達成比率)	親魚量 (括弧内は達成比率)		
まき網漁業	①マアジ	対馬暖流系群	下回る(78%)	上回る(115%)	↘
	②マサバ	"	上回る(120%)	下回る(51%)	→
	③カタクチイワシ	"	上回る(208%)	下回る(55%)	→
	④マイワシ	"	下回る(85%)	下回る(25%)	↗
	⑤ブリ	-	上回る(121%)	下回る(59%)	↘
	⑥クロマグロ	-	資源水準・動向 ↗		→
イカ釣り漁業	⑦スルメイカ	秋生まれ群 秋季発生系群	下回る(55%)	下回る(73%)	→
		冬生まれ群 冬季発生系群	下回る(90%)	下回る(20%)	→
	⑧ケンサキイカ	ケンサキイカ ブドウイカ	日本海・東シナ海系群	資源水準・動向 →	
沖合底びき網漁業	⑨ズワイガニ	日本海系群 A海域	下回る(54%)	下回る(94%)	→
	⑩アカガレイ	日本海系群	下回る	上回る(144%)	→
	⑪ソウハチ	日本海南西部系群	下回る(51%)	上回る(154%)	→
	⑫ハタハタ	日本海西部系群	資源水準・動向 →		→
べにずわいかご網漁業	⑬ベニズワイ	日本海系群 (大臣許可水域)	2022年の資源量水準(36.9%) 目標水準(80%)及び限界水準(56%)を下回る		→
沿岸漁業	⑭ヒラメ	日本海中西部・東シナ海系群	上回る	下回る(54%)	↘
	⑮サワラ	日本海・東シナ海系群	2021年の資源量水準(78%) 目標水準(80%)を下回り、限界水準(56%)を上回る		↘
	⑯マダイ	日本海西部・東シナ海系群	上回る(166%)	下回る(31%)	→
	⑰ナガレメイタガレイ	-	-	-	→
	⑱キジハタ	-	-	-	↗
	⑲ソデイカ	-	-	-	↘
	⑳サザエ	-	-	-	→
	㉑クロアワビ・メガイアワビ	-	-	-	↘
	㉒イワガキ	-	-	-	→
	㉓バイ	-	-	-	↘
	㉔アカナマコ・マナマコ	-	-	-	↗

※ 国による資源評価の表記の仕方:資源管理目標案等を提示した資源評価の対象魚種系群についてはMSY(最大持続生産量)を実現する値に対する現状の漁獲圧及び親魚量の状況を表記。なお、TACにより漁獲制限がかかっているクロマグロ及び、資源管理目標案等を提示していない資源評価の対象系群については国による資源動向の評価を記載。(※国の資源評価は2021年の状況)

※ 県による漁獲評価の考え方:水準は、過去2番目に多かった漁獲量を3等分し、低・中・高位に振り分け、動向は、直近5年間程度の漁獲動向を基本としながら、長期的な状況なども考慮して、県の水準と動向を担当者により総合的に判断した。

# トピック

## 天然ムラサキウニの成熟変化について ～美味しい時期はいつ？～

県内沿岸ではムラサキウニ（以下、「ウニ」）による海藻の食害が深刻化しています。現在、栽培漁業センターや漁業者によるウニの駆除及び駆除効果の把握等の取組が実施されており、身詰まりの少ない時期のウニを養殖し、利活用する試みも実施されています。ウニの可食部は栄養細胞を蓄えた生殖腺です。夏の産卵期には生殖腺は肥大し、内部に蓄えた栄養細胞が精子や卵に成熟し、生殖腺がドロドロに溶けてしまいます。この現象は「身溶け」と呼ばれ、甘味が無く、水っぽくなることから商品価値が低下します（図1）。今回は、天然ウニの最適な漁獲時期を検討するため、ウニの生殖腺の成熟変化を年間通してモニタリングしたので、その結果をご紹介します。



図1.身溶けしたウニ

試験は鳥取県沿岸の2定点（泊漁港・御来屋漁港）を調査地点としました。ウニの採取は、2022年1月25日～12月27日まで、各定点で毎月1～3回行いました。1回当たり6～10個体を採捕し、活かした状態でセンターへ持ち帰り、個体別に全重量、殻長及び生殖腺重量を測定し、GSI（生殖腺指数：生殖腺重量/全重量×100）を算出しました。さらに、測定後の生殖腺の組織切片を観察し、過去の文献を参考にして、成熟変化を5段階に分けました（図2）。Ⅰ（回復期）は栄養細胞が詰まり始めており、未熟な状態。Ⅱ（成長期）は辺縁部に生殖細胞が形成されている状態。Ⅲ（成熟前期）は成熟した生殖細胞が増加し、中心や縁辺に集まっている状態。Ⅳ（成熟後期）になると、発達した精子及び卵で満たされた状態。Ⅴ（放出期）は、生殖細胞の放出が終わり、空隙が見られる状態です。成熟段階とGSIの変化を図3に示しました。ここから泊と御来屋のウニの成熟パターンはほぼ同じということが分かります。泊では5月下旬、御来屋では6月上旬にⅢ（成熟前期）となり、身溶けが始まっています。成熟は7～8月に最盛期となり、9月に入ると放出期に移行し、11月まで続いています。

GSIは、泊で6月に9%、御来屋で9月に12%と最高値に達しましたが、いずれも成熟期に当たり、身溶けしています。つまり、GSIが高ければ必ずしも身詰まりが良いとは判断できないことが分かりました。

今回の研究では、本県沿岸では6月から11月頃までのウニは成熟期・放出期に当たり、出荷には不向きであること、また、12月から回復期に入り、春先に向けて徐々に身詰まりがよくなることが分かりました。したがって、鳥取県沿岸のムラサキウニの出荷適期は1月から5月までと考えられます。

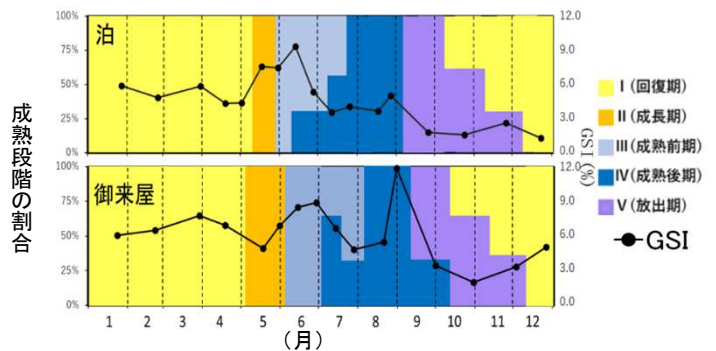


図3.ムラサキウニの成熟段階とGSIの変化

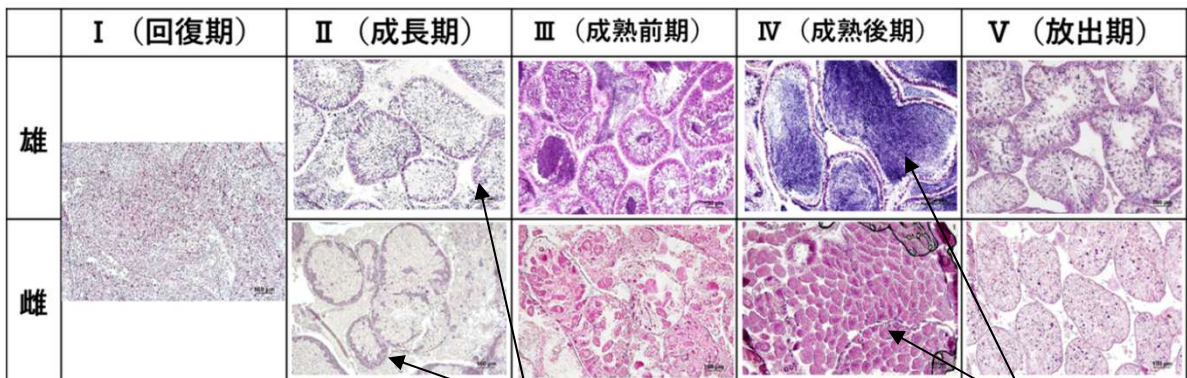


図2.ムラサキウニの成熟段階

生殖細胞(精母細胞・卵母細胞)

生殖細胞(精子・卵)

# トピック

## 鳥取県漁協酒津支所が「砂抜きサザエ」の出荷を開始

本県産サザエの品質、単価向上を目指し、酒津支所が2022年12月より「砂抜きサザエ」の出荷を開始しました。栽培漁業センターで関連試験を行ったので紹介します。

### ■酒津漁港産砂抜きサザエとは

漁獲した酒津産サザエを掃除、サイズ選別後、7日間以上、底の浅いコンテナに収容、蓄養し、専用のラベルをつけて出荷しています(図1)。



図1 砂抜きサザエ



### ■砂抜き実験結果の概要

絶食19日目及び32日目のサザエを官能試験に供したところ「砂等の食感が許容範囲で感じられる」との回答が最も多い結果でした(表1)。また、糞に含まれる砂等を継続的に確認した結果、砂抜きの基準である1週間後にピーク時の約7分の1に減少しました(図2)。ただし、32日目でも糞や砂、歯舌が確認されたことから、完璧な砂抜きは困難であると考えられました。

### ■単価の違いについて

12月11日から2月15日までの出荷先市場でのサザエの落札値の推移を調べたところ、期間を通じて砂抜きラベルありは酒津産ラベルなし、及び他産地と同程度または若干上回る程で推移しました(図3)。酒津産ラベルなし10kgあたり4,000円及び3,000円のところ、同ラベルありは4,800円及び3,300円の値がついた日もあり、単価向上の可能性が示されました。

産地卸売市場の関係者からの聞き取りでは単価向上には「品を切らさぬよう、継続出荷が大切」との意見を伺いました。

### ■有名料理人の評価

①無給餌(絶食38-39日間)、②絶食26日目からワカメ給餌③絶食26日目からキャベツ給餌を首都圏、関西圏の有名料理人11名に食べ比べて頂いたところ、最も良いとの回答はワカメ給餌(6名)で、キャベツ給餌(2名)、無給餌(1名)、無回答(2名)でした(表2)。

「ワカメは香りがよく、旨味も強く使いやすい」、「サザエという食材と給餌の手間を考えると砂抜きに特化した方が良い」、「キャベツもマイルドでブイヨンみたいで面白い」、「ワカメとキャベツは良い意味で蓄養の良さがでてい

引き続き、単価向上に向け継続的に取り組んでいきます。

表1 官能試験結果

畜養 日数 (日 目)	供試 数	対象 人数	内訳			
			全く感 じない	少々 (許容で きる)	少々 (許容で きない)	多 (許容で きない)
19	4	4	1	3	0	0
32	8	8	1	6	1	0



図2 サザエ6個体分の糞内容物量の推移

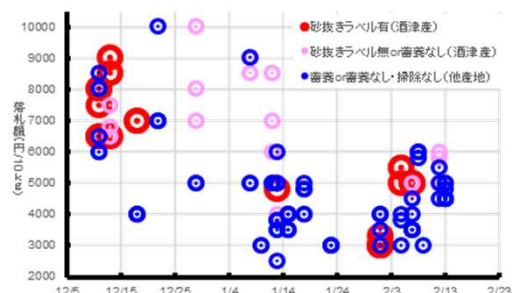


図3 砂抜きサザエ(ラベル有無)及び他産地との落札額の推移

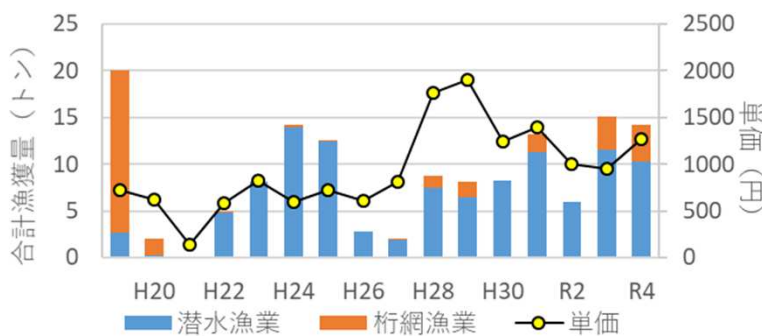
表2 有名料理人を対象とした官能試験結果

区分	砂抜きのみ (無給餌 38-39 日間)	無給餌⇒ ワカメ給餌 (26日間 (12-13日 間))	無給餌⇒キャ ベツ給餌 (26日間 (12-13日 間))	無回答
1番良い と感じた もの	1名	6名	2名	2名

## トピック

### 境港のアオナマコ資源管理 ～資源を計画的に利用するには？～

境港で水揚げされるマナマコ（アオナマコ）は、主に潜水や桁網漁業によって2月から4月の間に漁獲されます。2008年の漁獲量減少を機に、漁業者による自主的な資源管理のための漁獲規制が実施されてきました。しかし、2009年以降も漁獲量は増減を繰り返し、効果的な対策となっていない状況が続いていました。そこで、水産試験場では、2020年から境港のアオナマコを対象に資源管理方法を確立するための調査を実施してきました。3年間調査を続けた効果がみえてきましたのでご紹介します。



境港におけるアオナマコの合計漁獲量と単価の推移



市場調査の様子

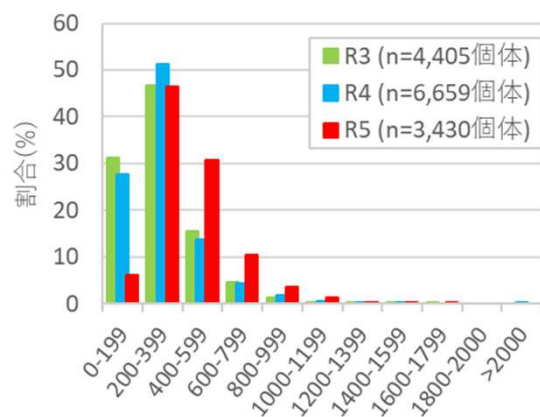
調査は漁期中に①資源量を推定するための標本船調査と、②漁獲物組成を把握するための市場調査の二本柱で実施しました。

①の調査結果から水産試験場が推定した資源量を参考に、漁獲圧抑制のための漁獲量規制を2021年から開始し、200kg/週・人の規制を現在も実践しています。この自主規制により、2022年も前年並みの漁獲量を維持し、2023年も同等の漁獲量が見込まれており、資源の維持と漁獲の安定という成果が現れています。

②の調査結果から、2021年の潜水漁業により漁獲されたアオナマコは、200g未満の小型個体が全体の30%以上を占めることが明らかになりました。未成熟な小型個体の取り控えは、資源管理に重要なことから、2022年からは200g未満個体の漁獲を避けるように漁獲サイズ規制も実施しています。2023年は特に、サイズ規制の強化を鳥取県漁協境港支所の販売職員が中心となり実施

した結果、200g未満個体の占める割合は6%と、これまでと比べて大きく減少しました。また、うれしいことに漁獲物の大型化により単価向上効果が見られ、2023年漁期の当初、1,650円/kgだった単価が、一時期2,300円/kgまで上昇しました。

目的を達成したことから当調査は2022年度で終了となりますが、水産試験場としては、今後も漁業者と協働し、『もうかるアオナマコ漁』を推進します。



境港における潜水漁業漁期中に漁獲されたアオナマコの重量組成 (nは測定個体数を示す)

# トピック

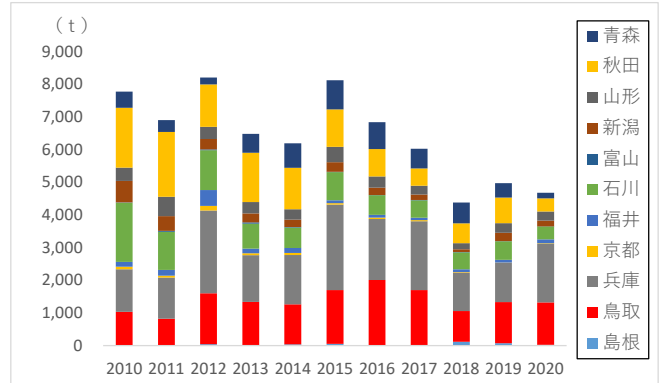
## ハタハタの2023年春漁の深刻な不漁について



本県のハタハタの漁獲量はここ近年、1,200～1,400トン台で安定しており、秋田県、兵庫県と並び、日本海側でも1,2を争う漁獲量を誇っています（図1）。

※本県のハタハタの漁獲量の詳細はP42-43を参照

ハタハタは本県の沖合底びき網漁の重要魚種で3～5月の春が盛漁期です。2022年の3～5月は15～17.5cmの2～3歳魚主体に好漁となりました。一方、次漁期の漁獲対象となる1歳魚の漁獲が少なく、2023年の春も好漁が続くかどうかはやや不安な状況にありました。



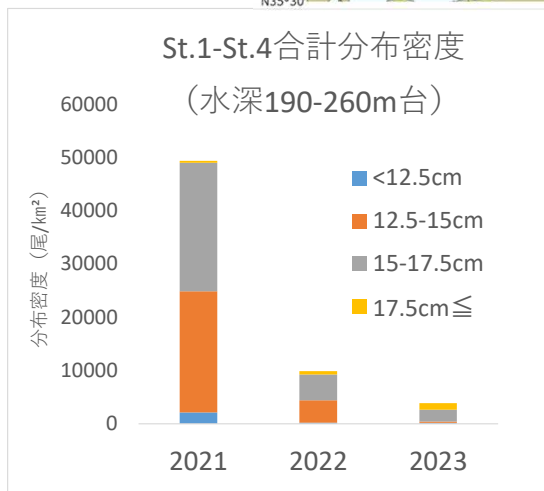
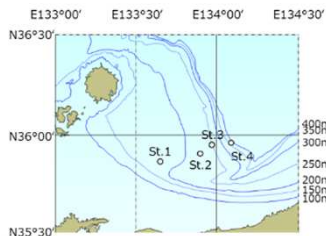
（図1）日本海側のハタハタの漁獲量の推移

### 【2023年春漁のハタハタの水揚げ状況について】 （分布量調査結果等の情報）

2023年の春漁を占うべく、水産試験場の第一鳥取丸にて分布量調査（2月27-28日実施）を行いました。結果は例年よりハタハタの分布密度がかなり低く、採取されたハタハタは15cm以上の3～4歳魚の大型サイズが主体で春漁の漁獲の主体となる2歳魚（12.5-15cm）が非常に少ない状況でした（図2）。

#### 〈調査方法〉

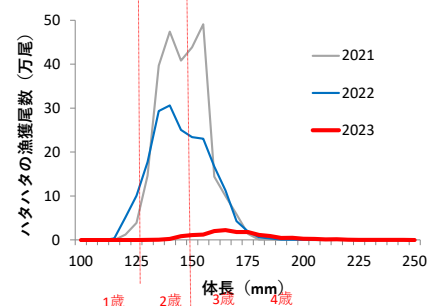
隠岐東南東の4定点でトロール網を30分ずつ曳網し、ハタハタの分布密度を把握



（図2）隠岐島南東の4定点でのハタハタの漁期前調査結果（2021-2023年の結果の比較）

実際に、2023年2月の市場調査結果でも水揚げされるハタハタは少なく、漁獲物のサイズ組成は15cm以上の3～4歳魚主体でした（図3）。

盛漁期の4月に入った現在も、水揚げされるハタハタはごく少量で、漁業者からも漁場にハタハタがいないといった情報を聞きます。



（図3）市場調査結果による2月のハタハタの体長組成（2021～2023年）

また、秋田県などが主産地となる日本海北部でも資源状況が近年、悪化しています（図4）。

不漁となっている要因ははっきりと分

かってませんが、引き続き、他府県の水揚げ状況の情報収集や、調査船調査、市場調査等で現場把握を行い、注意深く資源動向をモニタリングしていきたいと考えています。



（図4）日本海北部「天鷹丸」によるハタハタ現存量調査結果

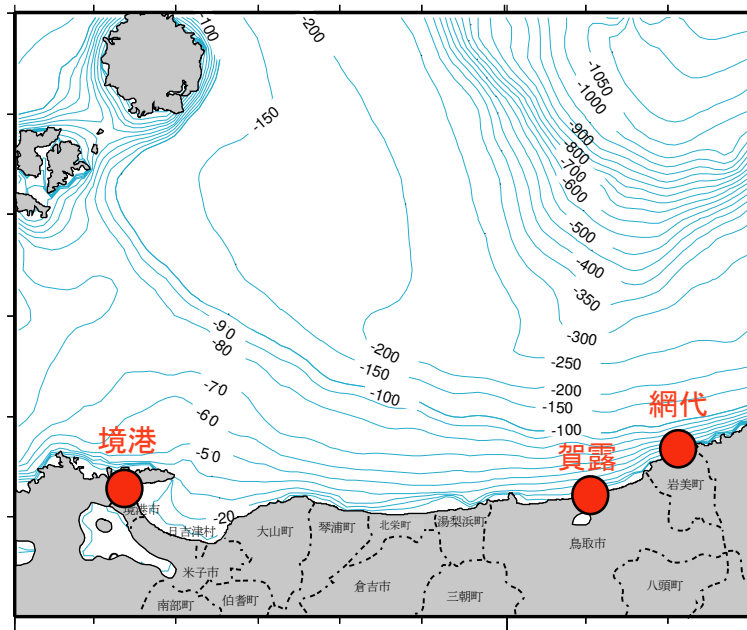


# 第1章

# 鳥取の港

## 沖合漁業の港

鳥取沖で漁獲された魚のうち、まき網で漁獲されたアジ・サバ・イワシなどの浮魚やベニズワイのほとんどは境港に水揚げされ、沖合底びき網漁業で漁獲されたズワイガニやカレイ類などの底魚類は賀露、網代、境港に水揚げされます。



### 境港(境漁港)



### 賀露(鳥取港)



### 網代(網代漁港)



ベニズワイの入札の様子



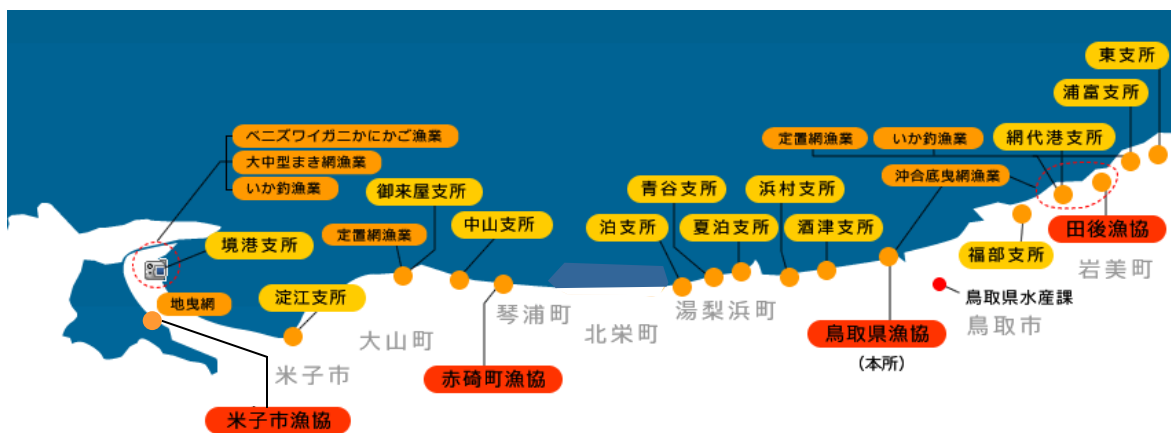
ハタハタのセリの様子



ズワイガニの活魚水槽の様子

## 沿岸漁業の港

鳥取県内で行われている沿岸漁業には、一本釣り、刺網、小型底びき網、潜水、定置、かご網漁業などがあります。漁獲物は各港で水揚げされ、県内や全国の市場に陸送されます。



定置網で漁獲されたマアジ



活魚出荷されるヒラメ



一本釣りで漁獲されたマダイ



セリの様子

## 第2章 海洋環境

### 鳥取沖の海の特徴

何の因果（いんが）で貝殻（かいがら）漕  
（こ）ぎなろうた

カワイヤノー カワイヤノ

色は黒うなる 身はやせる

ヤサホーエヤ ホーエヤエー

ヨイヤサノ サッサ

ヤンサノエー ヨイヤサノ サッサ

イタヤ貝の豊漁を歌ったこの貝殻節のように鳥取の海は古くからから沿岸に生活する人々に多くの海の恩恵を与えてきました。

青く澄み渡る日本海、緑豊かな山々。伯耆と呼ばれる西部には秀峰大山がそびえ、山からの豊かな栄養分を海にもたらしてくれます。

因幡と呼ばれる東部では、夏になると鳥取砂丘の沖に白いか（ケンサキイカ）を釣るイカ釣り船の漁り火が美しく輝きます。

浦富海岸の海の洞窟ではマアジの大群が群れを成しています。

このように鳥取県は豊かな海に囲まれ、海の幸を育てています。



撮影：山尾賢一氏



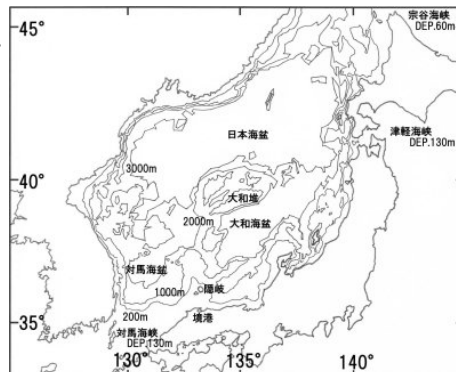
撮影：小河義明氏



撮影：中谷英明氏

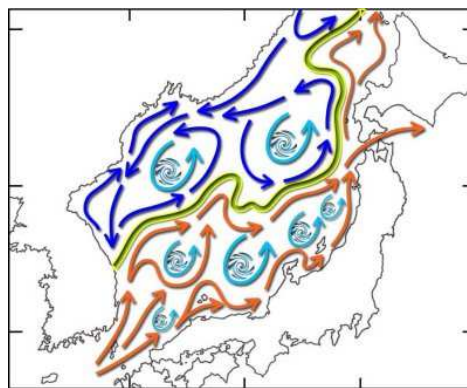
## 日本海の海の深さ

海の幸つまり海洋生物の棲む場となる日本海は、面積は約130万平方km、平均水深は1,350m、最深部3,700mで、日本海中央部には大和堆と呼ばれる大きな浅瀬があります。南北に位置する4つの浅く狭い海峡によって、東シナ海、北太平洋、オホーツク海とつながっています。



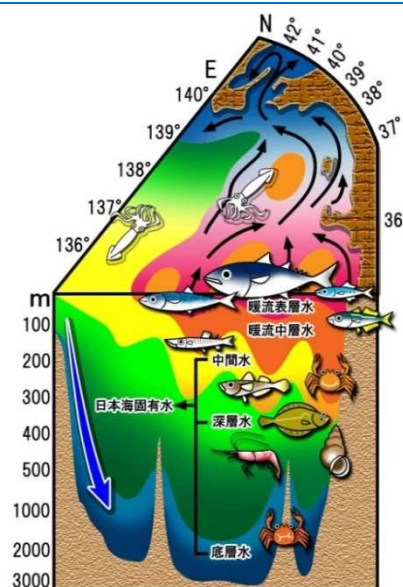
## 日本海の海流

表層は赤色の矢印で示す東シナ海から流入する温暖・高塩分の対馬暖流と、青色の矢印で示す間宮海峡付近を起源とする寒冷・低塩分のリマン寒流によって特徴付けられます。また北緯40度付近には黄色の線で示す両水塊が接する極前線と呼ばれる大きな潮目があります。中深層には、空色の渦で示す水温・塩分がほぼ一定な“日本海固有冷水”と呼ばれる水塊があります。特に山陰東部沖の冷水塊を山陰・若狭沖冷水と呼んでいます。



## 生物の住みかとしての日本海

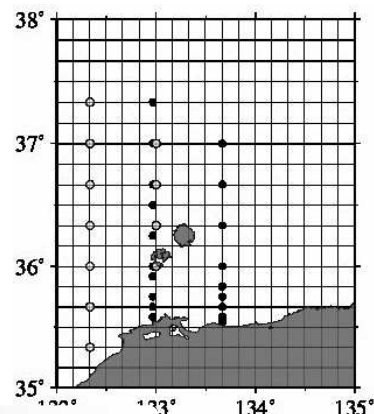
鳥取の海の底には大山の火山岩からなる天然礁があり、プランクトンや小魚などの餌が豊富なためそれらを食べる多種多様な水産生物が集まってきます。海表面から水深100mまではイワシなどの小魚や、それらを食べるクロマグロが回遊しています。日本海固有冷水が影響する水深200mから海底付近では、松葉がに（ズワイガニ）やハタハタ、アカガレイなどが棲んでいます。これらの水産資源を適切に管理しながら、有効に活用する循環型の水産業を目指していくことが大切です。



## 鳥取沖調査海域の水温変化

鳥取県水産試験場では調査船「第一鳥取丸」を使用して北緯35°～39°、東経132°～134°の海域で1月を除き毎月、海洋観測を行い水温を測定しています。

右図で示した鳥取県周辺海域19定点(○は7月、●は7月を除いた各月)で測定した水温データを用いて、平年との差異を解析し、水温変化の特徴を5段階で評価しています。



### 調査海域水温の評価結果

2022年の鳥取県周辺海域19定点平均水温の観測値(°C):上、平年との差(°C):下

水深	1月	2月	3月	4月	5月	6月
0m		12.4 (-0.3)	11.9 (-0.1)	13.4 (+0.1)	15.6 (+0.3)	19.7 (+1)
50m		12.5 (-0.1)	11.8 (-0.1)	12.9 (+0.2)	13.9 (+0.1)	17.2 (+1.5)
100m		12 (+0.6)	11.3 (+0.6)	11.3 (+0.4)	10.9 (-0.6)	15 (+2.5)
200m		3.1 (+0.1)	3.7 (+0.9)	4.44 (+1.7)	1.78 (-0.8)	3.47 (+0.1)
水深	7月	8月	9月	10月	11月	12月
0m	24.9 (+3.2)	26.2 (+0.4)	27.6 (+1.2)	欠測※	20.3 (-0.3)	19.3 (+1.2)
50m	18.6 (+2.8)	21.4 (+2.7)	22.1 (+2.3)	欠測※	20.1 (+0.1)	19.3 (+1.3)
100m	13 (+0.9)	16.8 (+2.9)	14 (+0.2)	欠測※	16.2 (+0.9)	16.5 (+0.8)
200m	2.18 (-0.5)	5.03 (+1.7)	6.2 (+3)	欠測※	4.17 (+0.7)	3.82 (+0.6)

※北緯36°以北の海域が欠測となったため、解析・評価を実施せず

### 評価方法

評価値  $X = (\text{観測値} - \text{平均値}) / (\text{平年標準偏差}) \times 100$  [平均:直近30年]

下表に従い評価

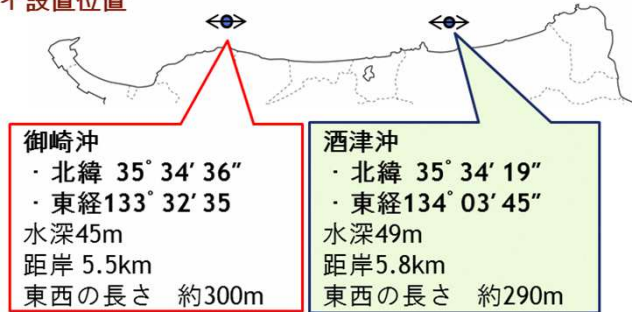
$X \leq -200$	$-200 < X \leq -130$	$-130 < X \leq -60$	
はなはだ低い	かなり低い	やや低い	
$-60 < X \leq +60$	$+60 < X \leq +130$	$+130 < X \leq +200$	$+200 < X$
平年並	やや高い	かなり高い	はなはだ高い

2022年における調査海域の水温は2月～5月まで平年並みに推移した後、6月～9月は平年より高めの水温を示しました。11月は再度平年並みに推移し、12月は平年より高めの水温を示しました。7月の0m深は平年値との差異が最も高くなり、平年より3.2°C高い水温が認められました。

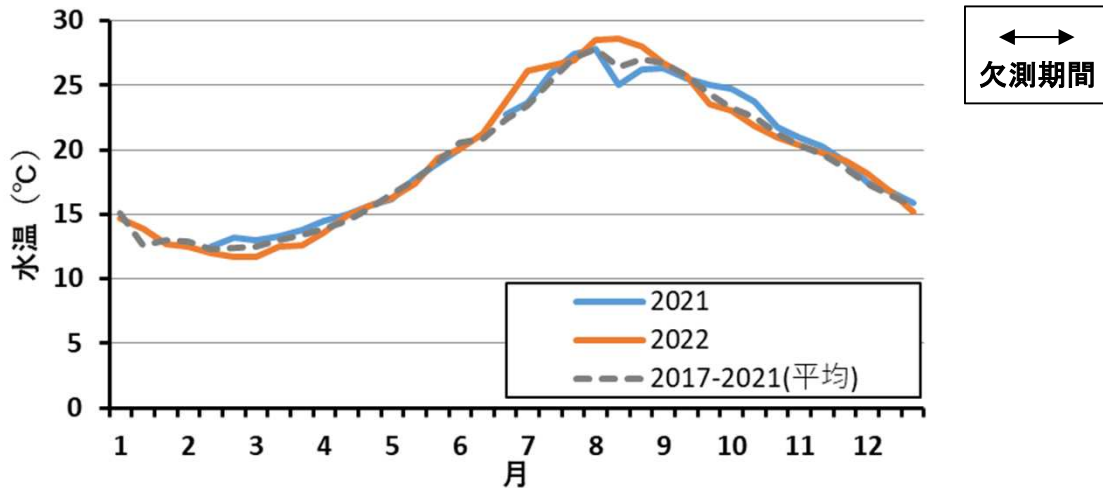
# 鳥取沿岸の水溫、潮流變化



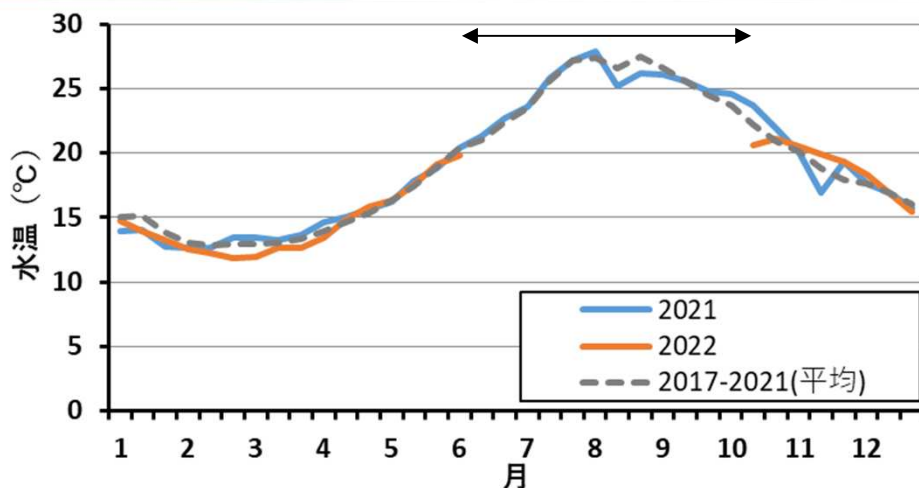
★ブイ設置位置



酒津沖潮流観測ブイ 表面水溫(旬平均)

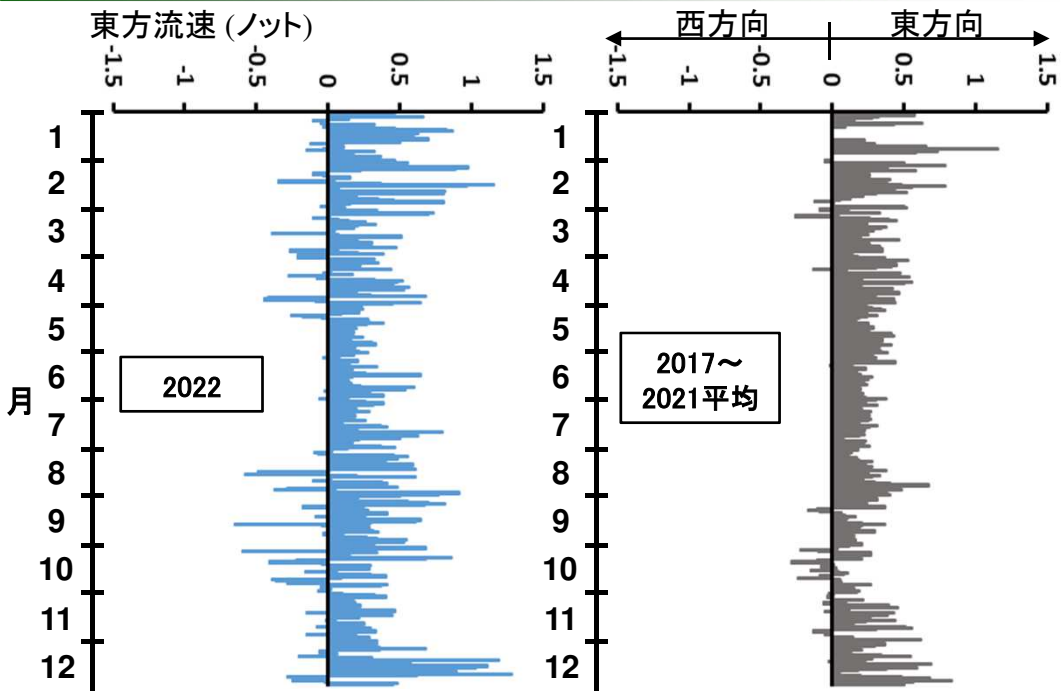


御崎沖潮流観測ブイ 表面水溫(旬平均)

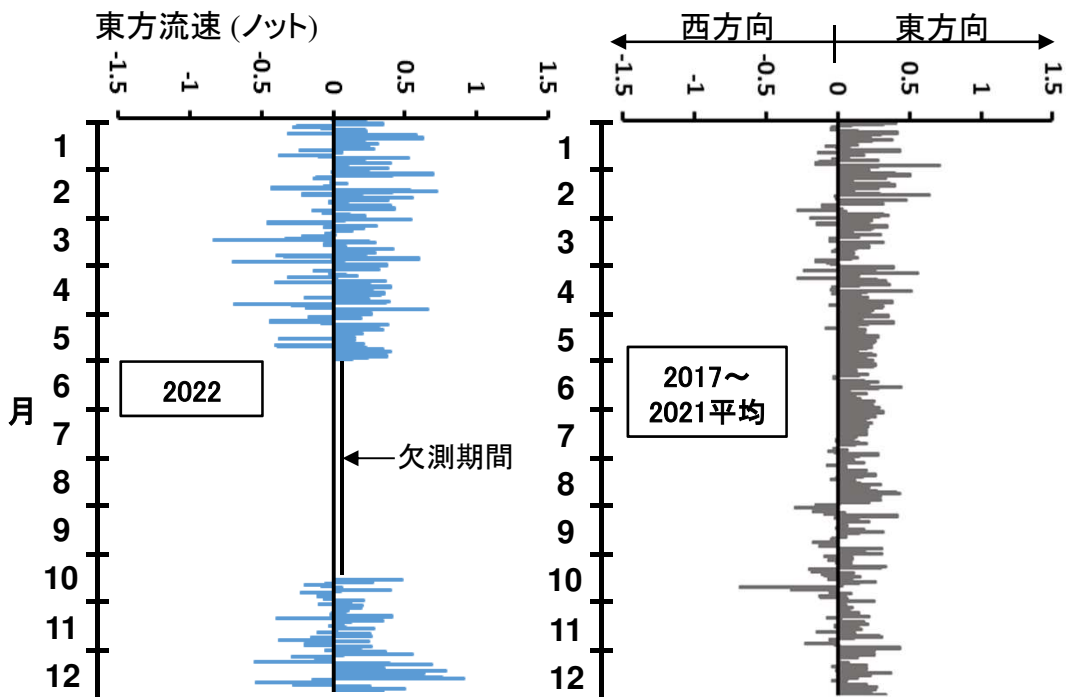


2022年における酒津沖潮流観測ブイで測定した表面水溫は、6月下旬から7月中旬まで平年より1°C以上高く推移しました。御崎沖潮流観測ブイは、6月から9月まで不具合が発生し、欠測期間が生じました。

酒津沖潮流観測ブイ 26 m深潮流



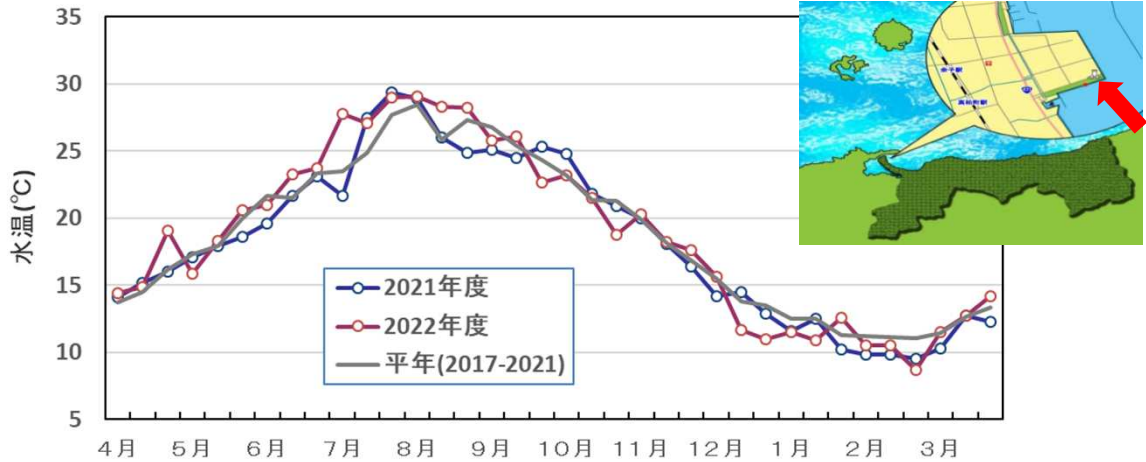
御崎沖潮流観測ブイ 26 m深潮流



東方流速が正の値=東方向、負の値=西方向の流れが卓越していたことを表しています。鳥取沿岸では例年東方向の流れが卓越する傾向がありますが、2022年の御崎沖では東西へ流向が激しく変動する流れが認められました。潮流ブイ不具合のため欠測期間があります。

## 美保湾の表層水温等の旬別変化

2009年度からの美保湾（夢みなと公園前）の水温などを調べています。



2022年度における表面水温は、7月上旬～下旬の間、平年より1°C以上高めに推移しました。特に、7月上旬の観測水温は27.8°Cを示し、平年より4°C高い値が認められました。

## 山陰沖の流況・水温・塩分予測図を公開中

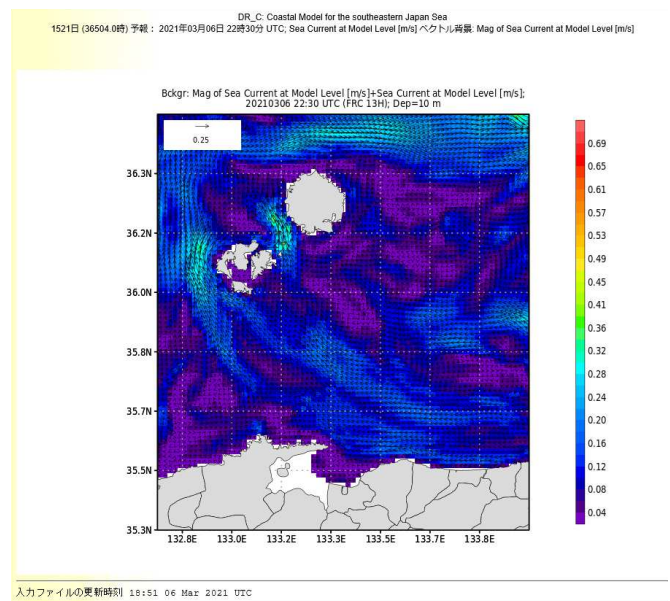
### 入力画面

DREAMS\_C 簡易表示ツール(鳥取県の潮流・水温予測図)

日本時間	2021年03月07日 17時30分	前へ
世界標準時	2021年03月06日 22時30分	表示
水深	10 m	次へ
表示領域	* 隠岐～鳥取西部 ○ 鳥取東部 ○ 兵庫県 ○ 鳥取県 ○ 山陰沖	
表示項目	* 流況 ○ 水温 ○ 塩分	
表示方法	○ 相対表示(カウンスールが変動します) * 絶対表示 * 流速のみ カウンスールは最大0.7m/s(約1.5ノット)に固定されます。	

※以下の表示は九州大学応用力学研究所のウェブページです。利用の際は同サイトの規約に準じてください。

### サンプル(流況図)



水産試験場HPで、約7日後までの流況・水温、塩分予測図が閲覧出来るツールを提供しています。日付、水深帯、海域を入力することで、簡単に知りたい予測図を表示させることが可能です。

本ツールは京都府農林水産技術センター海洋センターより提供して頂きました。また、予測図は九州大学応用力学研究所に協力頂き作成されています。現在から過去の時点も含め、海洋・気象観測データなどからシミュレーションモデルで計算された結果で、実際の状況と異なることがありますので、ご承知ください。



### 第3章

## 水産資源

### まき網漁業の概要

境漁港は浮魚水揚量が全国的に見ても多く、その大部分が「まき網漁業」によるものです。漁船の大きさ（トン数）により「大中型まき網」と「中型まき網」に分けられ、主に鳥取・島根の大中型と島根（隠岐）の中型が水揚げをしています。夏のマグロのシーズンには、石川、長崎、東京等の船団も加わり、より一層にぎやかになります。

【魚種】 マアジ、マサバ、イワシ類、ブリ、クロマグロ等

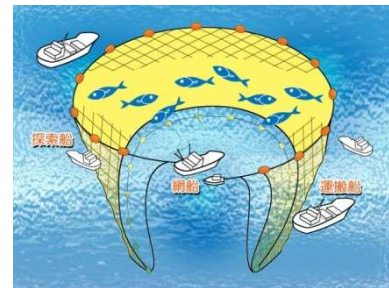
【漁場】 隠岐・浜田周辺：アジ、サバ、イワシ類など

日本海中西部：ブリ、クロマグロ

【隻数】 境港に水揚げする主な船団数

大中型：4船団 中型：8船団

※マグロの時期は船団数も増加します。

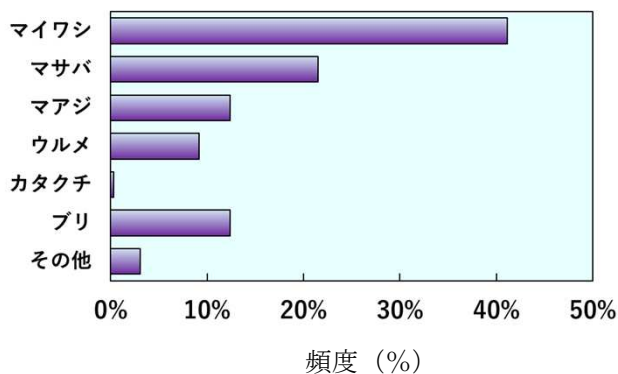


【漁法】 「まき網漁業」は長方形の大型の網を円形状に張って行き、魚群を取り囲む漁法で、船型の異なる複数の船が船団を組んで操業を行います。大中型まき網の場合は、一般に網船1隻、探索船2隻、運搬船2隻の合計5隻で1船団が構成されています。

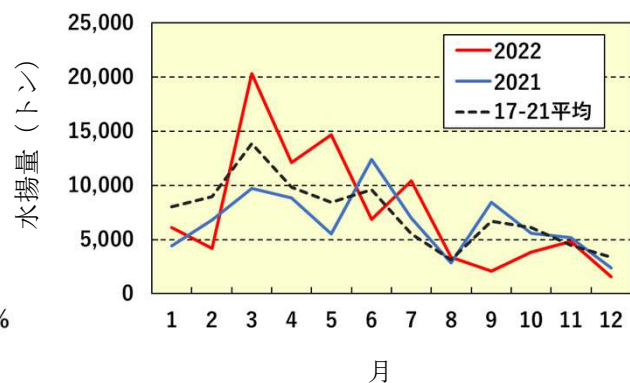
### 水揚の状況

2022年の境港におけるまき網漁業全体の水揚量は90,497トンでした（前年比:114%（前年79,242トン））。魚種別にはマイワシ（41%）が最も多く、次いでマサバ（21%）、マアジ・ブリ（12%）の順となっていました。秋～冬季に限れば水揚量が少なかったですが、3～5月および7月など、平年を大きく上回る月も多く、境漁港の水揚量10万トン突破に大きく貢献しました。

境港のまき網水揚割合



月別水揚量の比較



## 現状の課題と解決に向けた試み

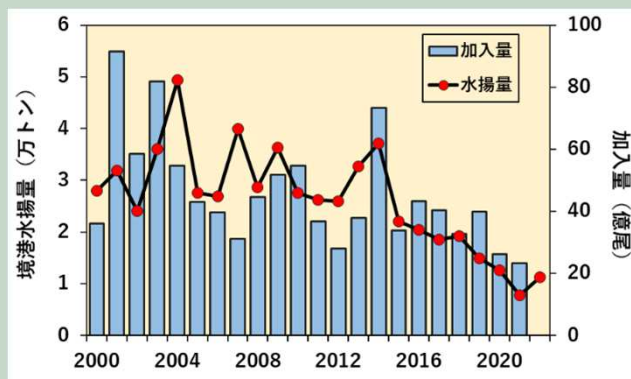
### マアジの水揚量と新規加入量調査について

2022年の境漁港におけるマアジの水揚量は11,238トンとなり、昨年から3,496トン増加しました。一方で、過去5年平均値と比較すると77%であり、また10年前からは約3分の1に減少しています（2013年：32,687トン）。これらのことからわかるように、ここ近年で急激にマアジの減少傾向が見られています。

この原因はまだよくわかっていませんが、考えられる1つの要因として、幼魚の加入が良くなかったことが考えられます。実際、下に示した図のように、マアジの加入量と境港のマアジ水揚量の傾向はよく一致しています。加入量を算出する資源評価は（国研）水産研究・教育機構が行いますが、水産試験場ではその重要な参考情報となる「マアジ新規加入量調査」を、関係機関と協力して実施しています。この調査は2003年から実施しておりその年生まれの魚がどれだけ漁場に参加したかを調査するものです。

今年度調査においては、あまり多くのマアジが加入したとは言いづらい結果となり、その傾向はここ数年継続しています。あまり加入が良くない年が続いてしまうと、複数の年級群で豊度が少ない状況となり、全体としてマアジの水揚量の不振につながってしまうと考えています。

加入量は海洋環境を始めとしたさまざまな要因により大きく変動します。現在、マアジ対馬暖流系群の資源は安定した状態にあると考えられていますが、こうした傾向がこれからも続いた場合、その状態を維持することは難しくなります。今後も正確な資源評価を行うために、引き続き調査を継続していきたいと思えます。



加入量と水揚量の推移



調査の様子

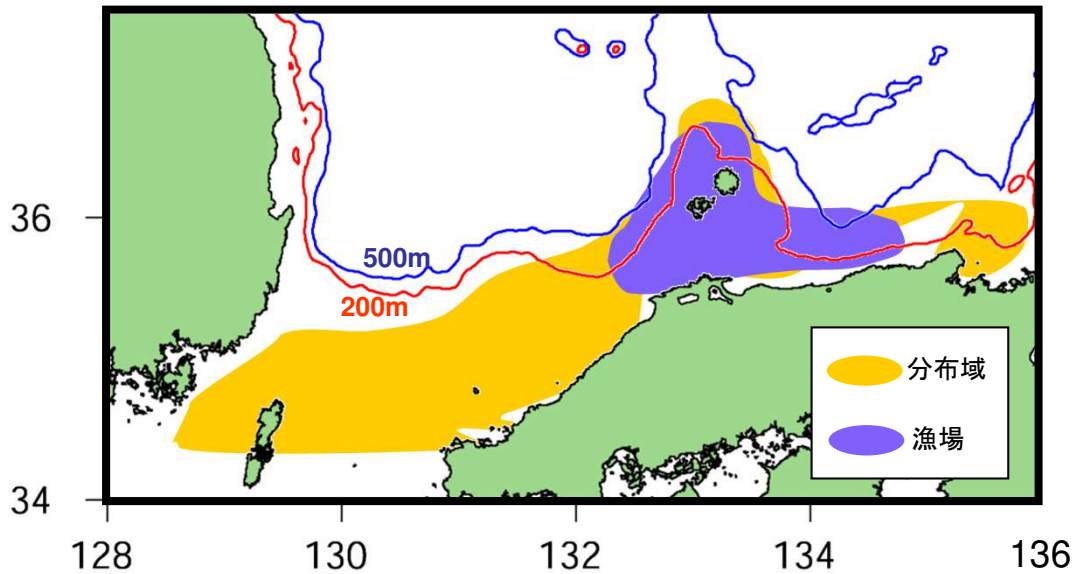
（国研）水産研究・教育機構「資源評価報告書」より作成

# マアジ (市場名 ヒ)



## 生態

**【分布】** 南シナ海～北海道まで各地。日本海側では長崎県、島根県の漁獲が多い。群れで生活することが多く、沿岸から沖合の主に浅所を遊泳する。昼は海底近くにいるが、夜になると海の表面近くまで上がってくる。

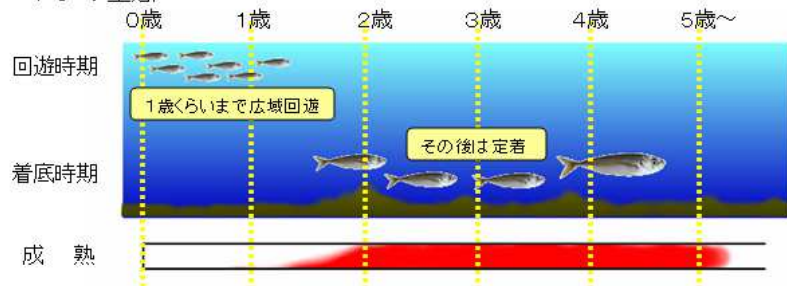


**【成長】** 通常、寿命は5歳前後と考えられている。最大で尾叉長50cm程度まで成長する。

**【成熟と産卵】** 早いもので1年、概ね2～3年で成熟する。西日本の産卵期は1～6月。通常、南ほど早く、盛期は3～5月。東シナ海、九州沿岸、日本海沿岸で直径約1mmの卵を産む。

**【食性】** シラスなどの小魚や小型甲殻類などを摂餌。

マアジの生態



## 漁業の特徴

**【漁法】** 鳥取県では主に大中型まき網により漁獲される。沿岸域では定置網漁業、刺網漁業による漁獲が多い。

**【漁期】** 周年漁獲される。鳥取県周辺では初夏のころに脂がのる。

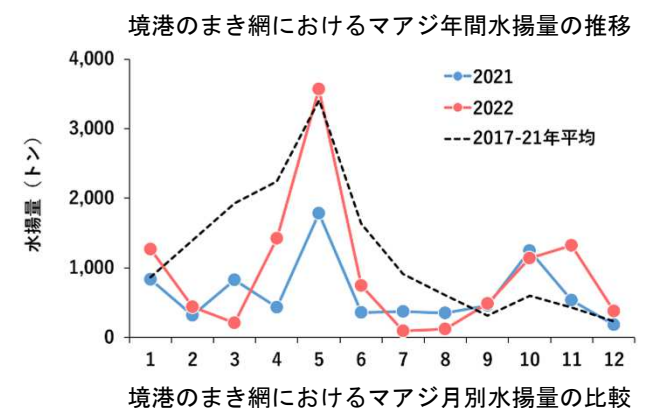
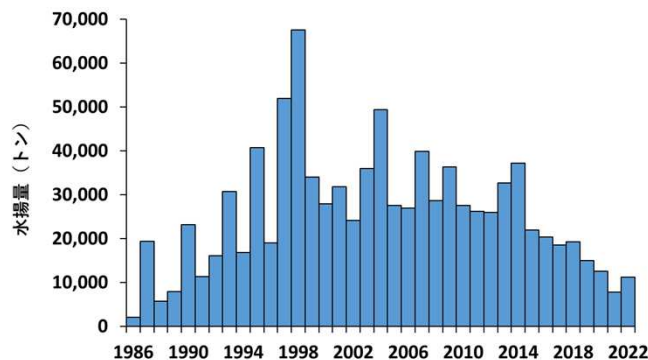
## 漁獲状況

低位・減少



2022年の年間の水揚量は11,238トンでした。昨年は7,742トンと1万トンを割り込み過去30年で最低を記録、2022年はその昨年こそ超えたものの引き続き低い水準となり、長期的な減少傾向は継続しています。

月別に見てみると、1、5、9～12月に過去5年平均を上回りました。近年は秋期に水揚げが減少する傾向がある中、秋季に2年連続で好調な水揚げがありました。日本海のマアジ資源の状態は良いとされているものの境港の水揚げは減少しています。この乖離の原因を探ることが、直近の課題と考えています。



## マアジ以外のアジ類の資源評価に参画します

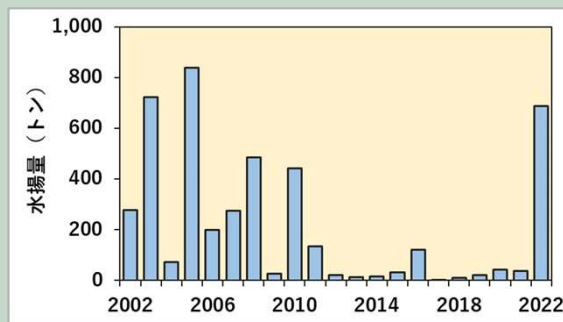
境港でアジと言えばマアジ (*Trachurus japonicus*)を指しますが、実はよく観察してみるとマアジ以外のアジが混ざっていることがあります。代表的なものに境港ではアオアジと呼ばれるマルアジ (*Decapterus maruadsi*)、まれにモロ (*Decapterus macrosoma*)などを見かけます。

これらの魚種はムロアジ属に分類され、南方性で資源評価は西海ブロック（九州エリア）で行われていましたが、記録を遡ってみると境港において少なくとも20年前から水揚げがあり、マルアジに関しては水揚げの多い年には800トンを超え、鳥取県においてもまとまった水揚げがあることがわかりました。

このことからオブザーバー参加に留まっていたマルアジに関しては令和4年度から資源評価機関として参画、モロに関しては引き続きオブザーバーではあるものの今後は測定・サンプリングを行い、資源評価精度の向上に寄与していきたいと思えます。



上からモロ・マルアジ・マアジ



ムロアジ類の水揚げ量の推移

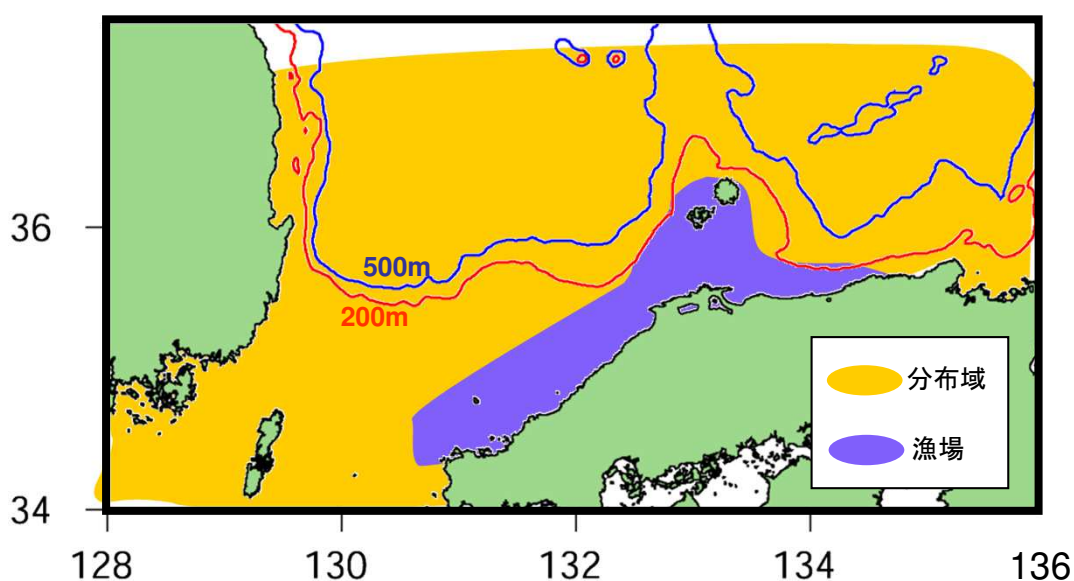
## マサバ (市場名 メ)



### 生態

【分布】 日本周辺の沿岸～沖合域。

日本海側の系群は夏季に索餌のため北上し、秋季から冬季に産卵・越冬のため南下するとされる。



【成長】 寿命は6歳前後と考えられ、最大で尾叉長50cm程度まで大きくなる。

【成熟】 成熟年齢は1歳で半数、3歳で完全に成熟する。春季に東シナ海から日本海西部の沿岸域で産卵する。

【食性】 カタクチイワシ等の魚類やオキアミ、アミ、カイアシなどの甲殻類を摂餌。

### 漁業の特徴

【漁法】 鳥取県では大中型まき網、一本釣、刺網漁業により漁獲される。水揚量のほとんどはまき網による。

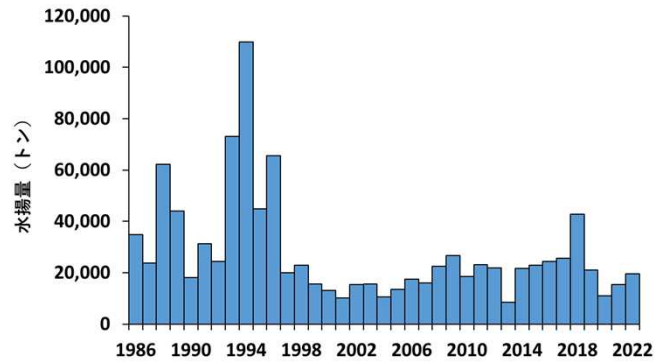
【漁期】 まき網では、秋から冬に多く漁獲され、刺網では春に漁獲される。

## 漁獲状況

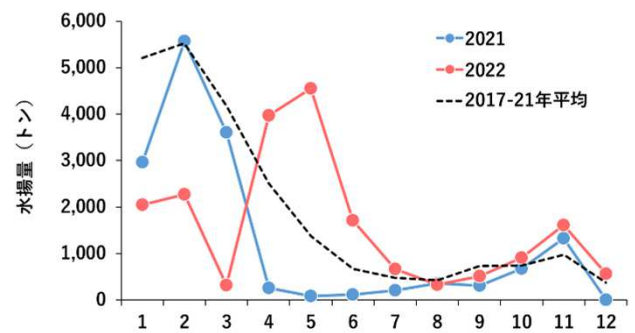
## 中位・横ばい

2022年の水揚量は19,452トンで、前年比126%、平年比84%となりました。概ね2万トン前後で長らく安定してきたマサバ水揚量ですが、2018年の4.2万トンや2020年の1.1万トンなど、近年は水揚量の年変動が大きい傾向にあります。また通常であれば冬季が主漁期のマサバですが、2022年は春季に最も多く水揚げされる等、漁期にもズレが見られました。

体長組成は例年と同様に0・1歳魚を中心に水揚げされました。2018年以降は、尾叉長30cmを優に上回る2歳魚以上の水揚げも顕著に見られるようになってきており、2022年も近年と同様に大型魚がよく見られました。



境港のまき網におけるマサバ年間水揚量の推移

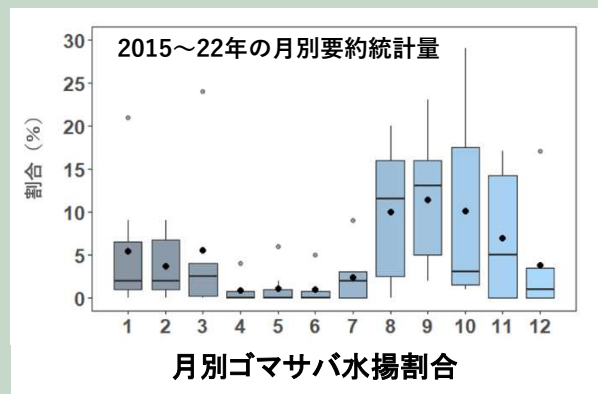
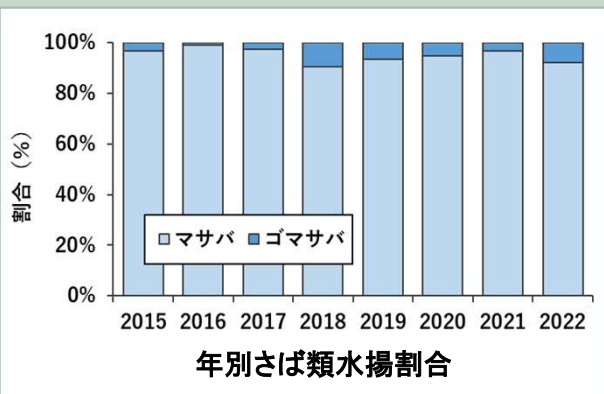


境港のまき網におけるマサバ月別水揚量の比較

## 近年の境港におけるゴマサバ漁獲状況

サバ類にはマサバとゴマサバがおり、ゴマサバは比較的暖かい海域で多い種です。水産試験場では、2015年より測定したサバからマサバとゴマサバの種判別を行っており、8年分のデータが蓄積されていますので、そこから年別・月別の漁獲割合をご紹介します。

まず年別に見ると、判別開始当初の2015年以降、ゴマサバの割合が緩やかな増加傾向にあることがわかってきました。年によって差はありますが、例えば最も多かった2018年ではおよそ10%であり、2018年はサバ類の水揚げが特に多かった年なので、水揚量で換算するとゴマサバだけで4千トン超の水揚げがあったことになります。また月別に見ると、春季に少なく、夏～秋期に多い傾向があることもわかってきました。こうしたデータの蓄積・解析によって、資源評価の高精度化に積極的に関わっていかねばと思います。

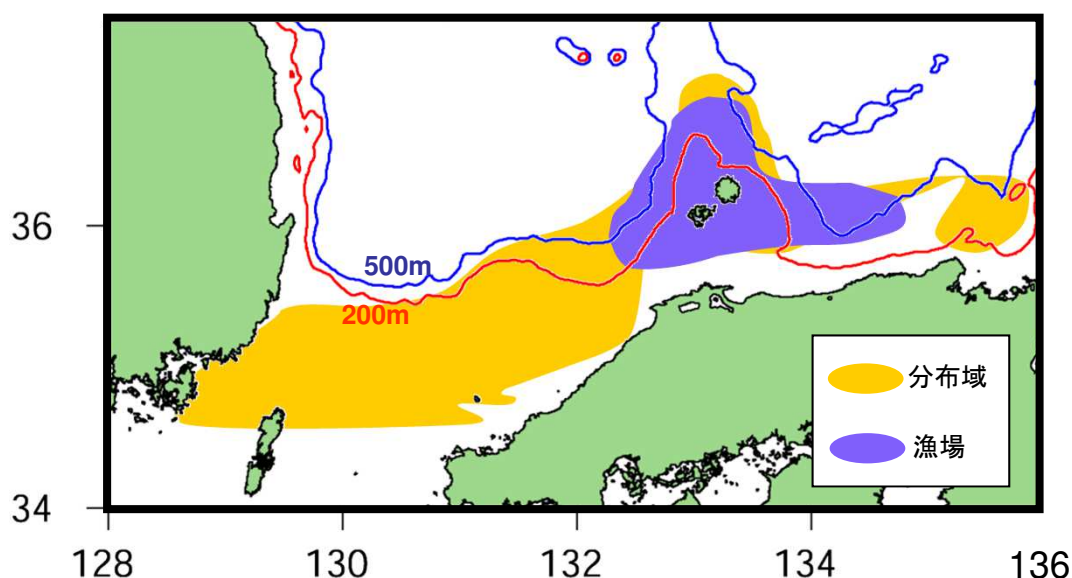


## カタクチイワシ (市場名タレ)



### 生態

【分布】 日本周辺の沿岸域。



【成長】 寿命は2歳と考えられ、最大で体長15cmくらいまで大きくなる。

【成熟】 満1歳で成熟し春季～秋季にかけて、東シナ海から日本海各地の沿岸域で産卵すると考えられている。

【食性】 カイアシ類などの動物プランクトンを主に摂餌。

### 漁業の特徴

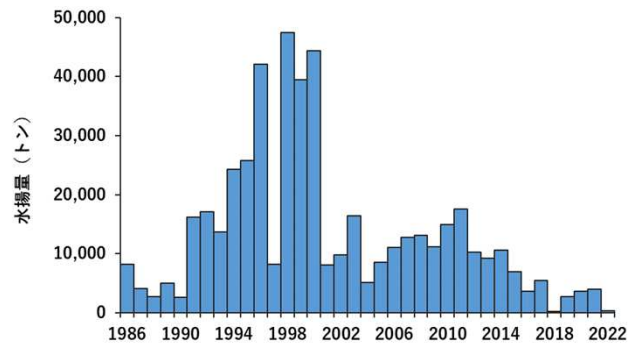
【漁法】 成魚は主に隠岐諸島のまき網により漁獲され、境港に水揚げされる。一方、シラス（稚魚）や幼魚は船曳網、すくい網などにより主に美保湾周辺の沿岸域で漁獲されている。

【漁期】 周年水揚げされるが、春と秋に多く水揚げされる。春に水揚げされる個体のほとんどが体長の大きな産卵親魚である。

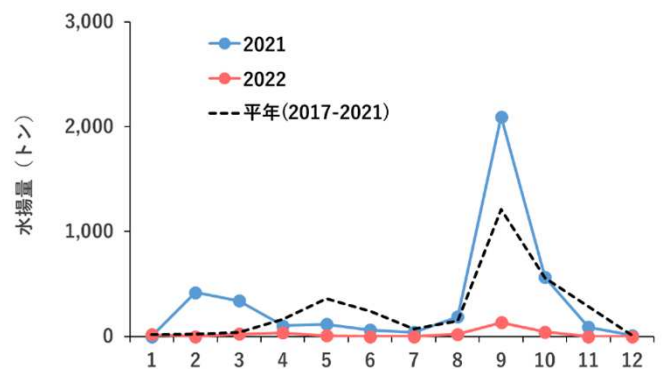
## 漁獲状況 低位・横ばい

資源状態は2013年から減少傾向で推移してきており、境港での水揚量も2012年以降減少傾向にあります。2022年の水揚量は286トンで、前年・平年を大きく下回り、過去30年で最低となった2018年に次ぎ2番目に低い水揚量となりました。

本種は令和3年度から新ルールでの資源評価が行われており、最新の令和4年度評価では親魚量は横ばい傾向と推定されました。一方で親魚量はMSY水準を下回っており、その回復のために高い漁獲圧を下げる必要があるとされています。境港においては、ここ近年、他魚種を狙うことで漁獲圧を低下させるようになってきています。



境港のまき網におけるカタクチイワシ 年間水揚量の推移



境港のまき網におけるカタクチイワシ 月別水揚量の比較

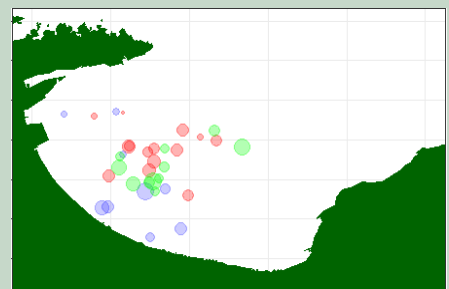
## 美保湾におけるカタクチイワシの調査

カタクチイワシは沖合だけでなく沿岸においても重要な魚種です。特に県西部に位置する美保湾においては、古くからすくい網や船曳網で盛んに水揚げされています。

しかし、その水揚量は増減が激しく、持続的・安定的な漁獲を続けるために資源動態の把握が求められており、当試験場は平成30年度から美保湾のカタクチイワシ調査を継続して行っています。調査では船曳網、すくい網漁業者の方々に標本船野帳の記入やサンプル提供等にご協力いただきながら、体長組成の把握や漁場の移り変わりなど、新たなことが少しずつわかってきました。今後もデータを蓄積し、引き続き資源動態の把握、漁獲に影響を及ぼす環境条件等の検討を進めていきたいと思ひます。これからも調査への御理解・御協力をよろしくお願いいたします。



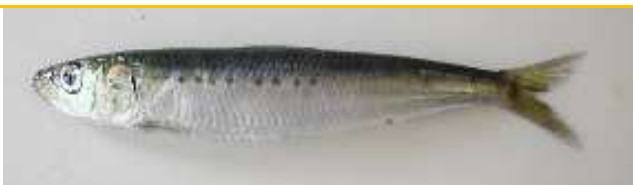
船曳網によるシラス水揚げ風景



標本船調査による漁場図



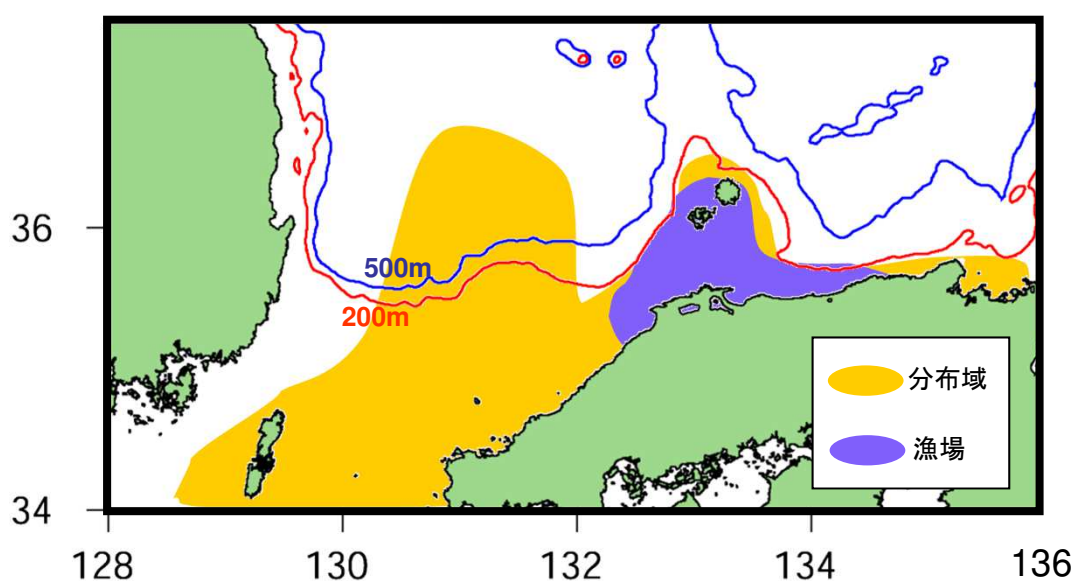
## マイワシ (市場名 ツ)



### 生態

**【分布】** 数十年周期で資源水準が大きく変動し、それによって分布範囲が異なる。

低水準期には日本各地の沿岸域。高水準期には日本近海を中心に東シナ海、オホーツク海などにも広がる。索餌や産卵に伴う南北の大規模な回遊も見られる。



**【成長】** 寿命は通常7歳前後で、体長25cmくらいまで大きくなる。まれに30cmまで成長。

**【成熟】** 1～2歳で成熟する。春季に東シナ海から日本海の沿岸域で産卵する。

**【食性】** カイアシ類や珪藻類などのプランクトンを摂餌。

### 漁業の特徴

**【漁法】** 鳥取県では、主に隠岐諸島のまき網により漁獲されたものが、境港へ水揚げされる。

**【漁期】** まき網では、春に成魚が、秋に当歳魚が多く漁獲される。

(※通常加入期において)

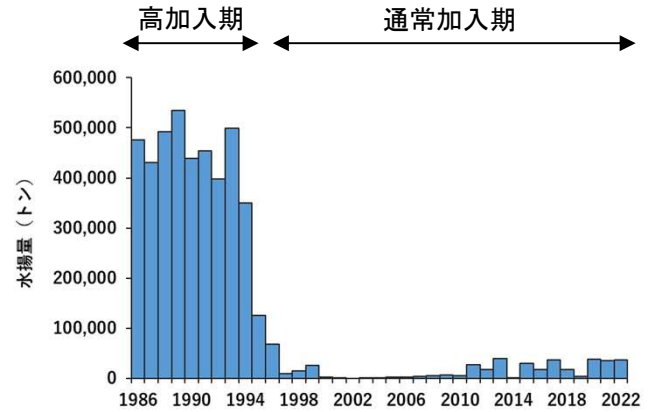
## 漁獲状況

高位・増加

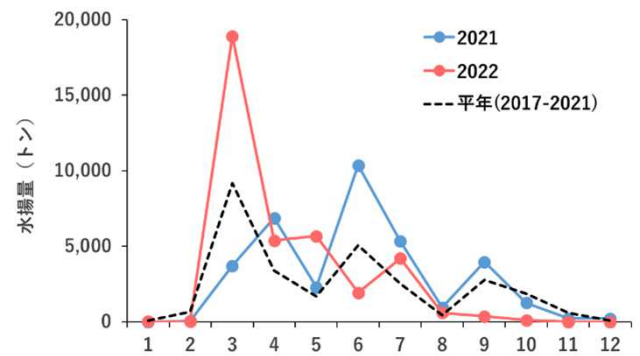


1990年代後半から資源が少なくなったマイワシ資源ですが、2011年に3万トン近い水揚げを記録し、以降は増加傾向にあります。2022年の水揚量は37,239トンで、3年続けて水揚量が3万トンを超えました。

一方でマイワシは2014年の965トン、2019年の3,771トンと水揚量が大きく減少する年も存在し、この現象の解明のために研究が続けられています。このように本種は水揚量の増減が激しい魚種として知られていますが、あまりに激しい増減だと、既存の資源評価手法での対応がととも難しくなります。従って、水揚量の変化に惑わされることなく、資源動向を正確に把握するために、モニタリングの精度を高めていく必要があると考えています。



境港のまき網におけるマイワシ年間水揚量の推移



境港のまき網におけるマイワシ月別水揚量の比較

## 資源変動の推定精度向上のための取組み

水産試験場では、1980年からイワシ類の卵と稚魚のプランクトンネットによる採集調査（卵稚仔調査）を行っています。また、2012年からニューストーンネットによるマイワシ新規加入量調査を行っています。

これらの調査により、マイワシの研究が着実に進められているのですが、卵や稚仔の数は年変動が大きく、環境変動による生き残りも影響を受けやすいことから、これまでの情報だけでは、資源変動の予測が難しいのが現状です。

そこで、R3・4年度に表層トロール網を用いて、幼魚（体長約10cm程度）の採集を試みましたが、残念ながらマイワシ幼魚は採集できませんでした。来年度も調査時期等の検討を行い、再度採集に挑戦します。



ニューストーンネット  
(網口幅1.3m、海面を曳網)



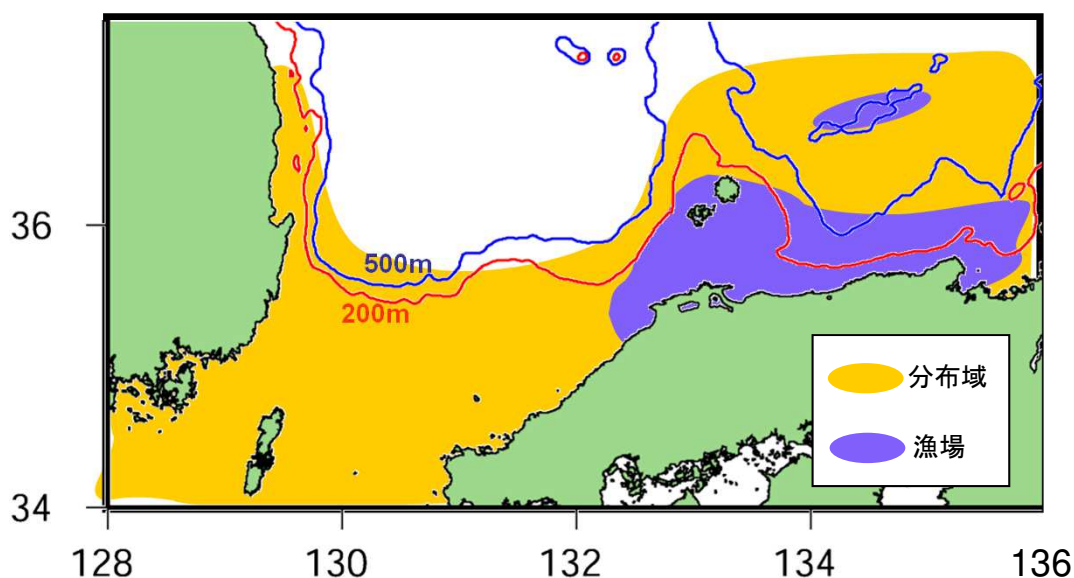
表層トロール網  
(網口幅12m、水深10~30m層を曳網)

# ブリ (地方名 (出世魚) つばす→はまち→まるご→ぶり)



## 生態

【分布】 日本周辺の沿岸～沖合域 (よく似たヒラマサは全世界の温帯・亜熱帯に分布)



【成長】 寿命は7歳前後で、大きなものは尾叉長115cm、20kg以上に成長する。

成長は早く、1歳で40cm (1kg)、3歳で70cm (4.5kg) 程度まで大きくなる。

【成熟】 概ね3歳で成熟する。産卵場所は東シナ海の大陸棚縁辺部が中心と考えられている。産卵期間は長く1～6月まで続く。

【食性】 稚魚は初期にはカイアシ類などの動物プランクトンを摂餌し、3cm程度に成長すると魚類を食べ始める。13cm以上になると、カタクチイワシ、スルメイカなどの魚介類を主体とするようになる。

## 漁業の特徴

【漁法】 鳥取県では、主に沖合の大中型まき網により漁獲される。沿岸においても刺網、定置網、一本釣により利用されており重要な魚種となっている。

【漁期】 まき網では、12～翌1月に多く漁獲される。沿岸ではやや小型 (5kg未満) のものが周年漁獲される。

## 漁獲状況

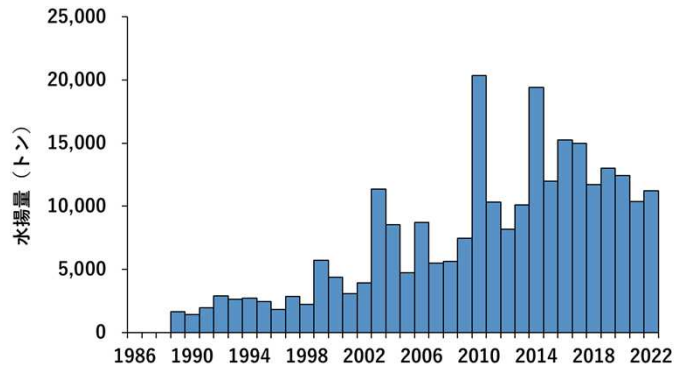
中位・減少



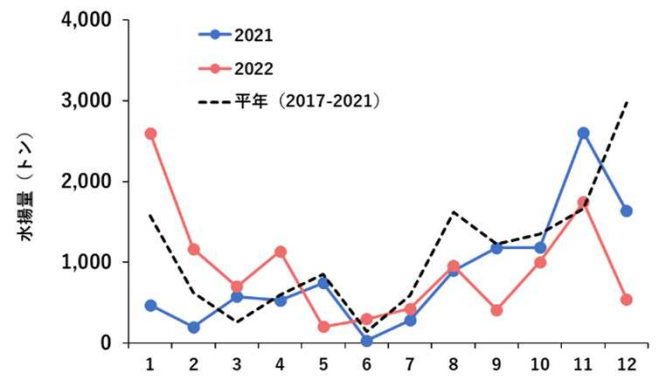
水揚量は2000年代以降は増加傾向が続いていましたが、2022年は11,203トンで、前年比108%・平年比95%とやや減少しました。

例年単価の上昇する12月にかけて水揚量が最も多くなる傾向があったのですが、最近では2021・22年と2年連続で12月の水揚量が大きく減少しました。また、小型のツバス銘柄が多く、ハマチ銘柄が少なかったことも今年の特徴と言えそうです。

ブリは令和3年度から新ルールでの資源評価が始まり、令和4年度評価において資源は減少傾向と推定されています。今後も資源動向を注視していき、モニタリングを継続する必要があると考えています。



境港のまき網におけるブリ年間水揚量の推移

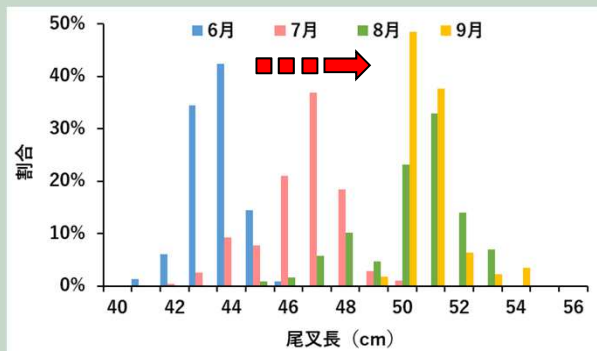


境港のまき網におけるブリ月別水揚量の比較

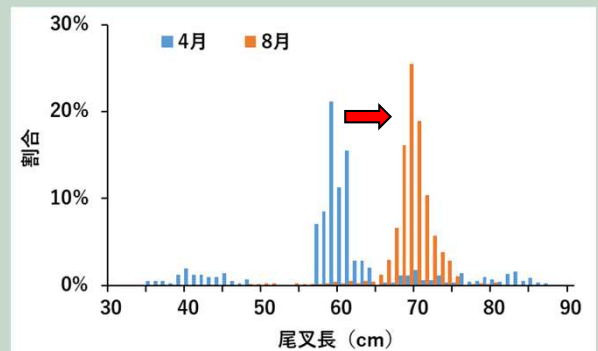
## R4年度からブリの市場調査を開始しました

ブリは上述の通り、令和3年度から新ルールでの資源評価が開始され、今後TAC管理することとされているため、現在その検討が進められています。

一方で、水産試験場はこれまでブリの市場調査は未実施でしたが、令和4年度より市場調査・魚体測定などの基礎的な調査を開始しました。その成果として下のグラフに示すように、月ごとの各年級群の成長を詳細に追うことができ、資源評価の精度向上に必要なデータを収集することができるようになりました。今後も調査を継続し、適切な資源管理を実施できるようにデータを蓄積していきたいと思えます。



刺網のハマチ銘柄の体長組成



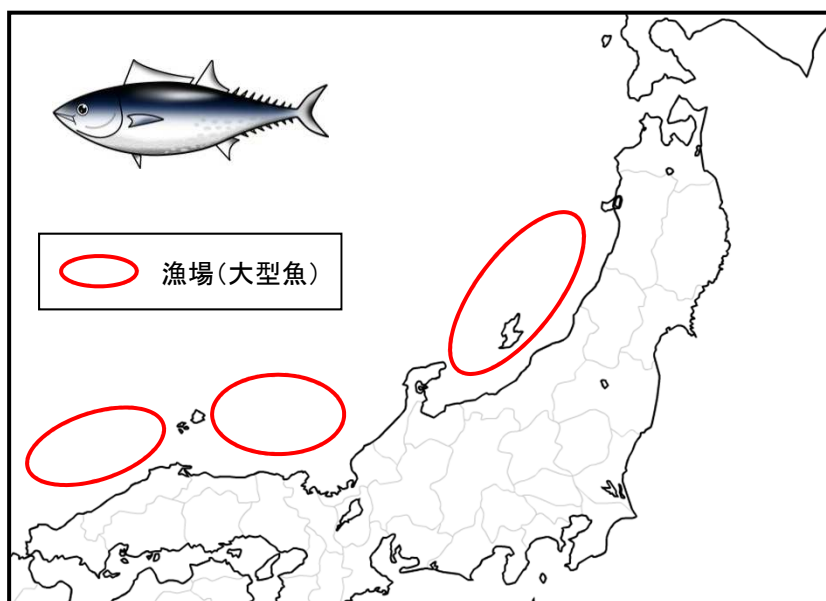
まき網のハマチ銘柄の体長組成

# クロマグロ (地方名 まぐろ、本まぐろ)



## 生態

【分布】 日本周辺をはじめ、太平洋の温帯域に広く分布する。



【成長】 寿命は20歳以上と言われ、最大の  
もので体長が3m、体重400kg近くまで  
成長する。

【成熟】 体長1mを超える3歳頃から成熟が  
始まり、日本南方～フィリピン沖では  
4～7月に産卵し、日本海では6～8月に  
産卵する。

【食性】 日本海では、スルメイカやカタクチ  
イワシなどの小型浮魚類を食べている  
ことが多い。

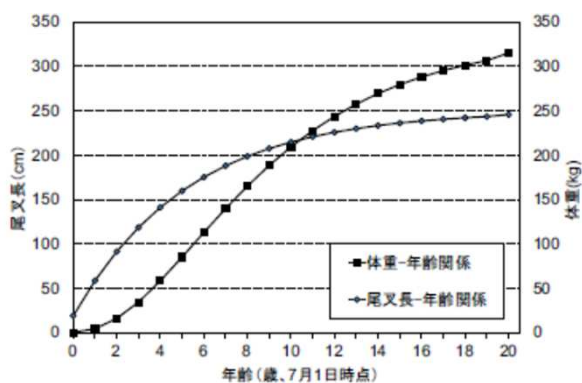
## 漁業の特徴

【漁法】 大中型まき網で漁獲され境港に水揚げされる。

【漁獲量・漁期】 TAC（漁獲可能量）管理魚種であり、漁獲上限が決められている。  
大中型まき網による日本海区の大型魚（30kg以上の成魚）は、2022年から  
漁業法に基づくIQ管理（漁獲割り当て）となり、各船団に漁獲量が配分さ  
れる。

大型魚の漁獲割当量（令和4年1月～12月末）：1,862トン

漁期：5月中旬～7月末



太平洋クロマグロの尾叉長・体重と年齢との関係  
(令和2年国際漁業資源の状況 水産庁・水産研  
究・教育機構より)

## 漁獲状況

中位・横ばい



・2022年の境港におけるクロマグロの水揚量は大型魚（30kg以上の成魚）が1,075トン（前年925トン）、小型魚（30kg未満の未成魚）のヨコワが12トン（前年109トン）でした。

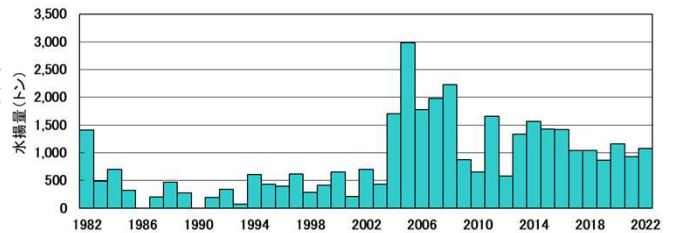
・6～7月に漁獲された大型魚の組成は、尾叉長（体長）132cm（体重40kg；推定4歳）、156cm（体重70kg；推定5～6歳）、182cm（体重110kg；推定7歳以上）に3つの明瞭なモードが確認されました。

・近年、比較的境港の水揚量は安定していますが、太平洋クロマグロの資源は低位にあるため、2014年の中西部太平洋まぐろ類委員会（WCPFC）の決定により国際的な保存管理措置（※）が講じられています。

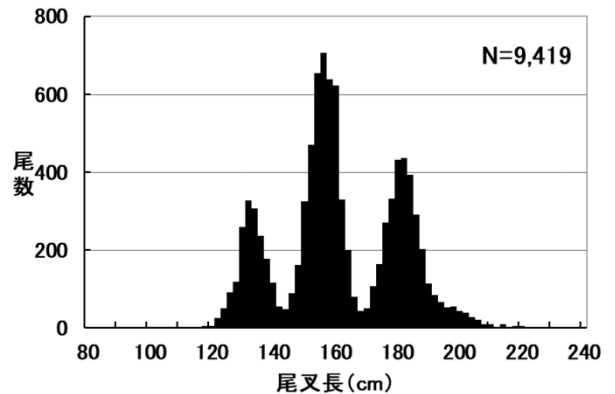
※小型魚の漁獲量を2002～2004年平均水準から半減。大型魚の漁獲量を2002～2004年平均水準から増加させない。

・この関係者による資源管理の取り組みにより、太平洋クロマグロ資源は順調に回復し、2020年の太平洋クロマグロの親魚資源量は約6.5万トンと見込まれており、暫定回復目標（約4万トン）を5年早い2019年に達成し、次期回復目標（約13万トン）も2023年に達成する見込みです。

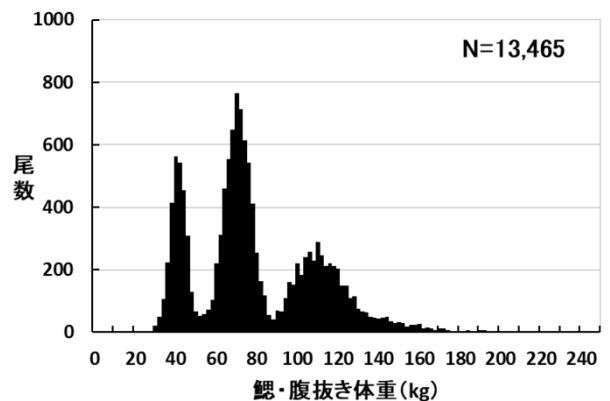
・2023年の境港の水揚げですが、体重75kg前後（5～6歳）は資源がそれほど多くなく、前年の水揚げをやや下回ると思われるが、資源が多い、体重90kgを超える（7歳以上）個体の水揚げが前年を上回る可能性があります。



境港のまき網におけるクロマグロ水揚量の推移（大型魚）



尾叉長(体長)組成(2022年大型魚)



体重組成(2022年大型魚)

### 資源を大切に使うための調査や取り組み

水産試験場では、市場へ水揚げされたクロマグロの体長測定や産卵状況を確認するための卵巣組織採集を行うとともに、平成22年度より、国や他県と共同で仔魚調査（ネット曳きによる生まれて間もない仔魚採集）を行い、生残過程等を調べています。



クロマグロの仔魚

(H22年7月)

試験船第一鳥取丸で採集



市場での体長測定

## イカ釣り漁業の概要

夜間に集魚灯に集まったイカを自動イカ釣り機により擬餌針で釣り上げます。

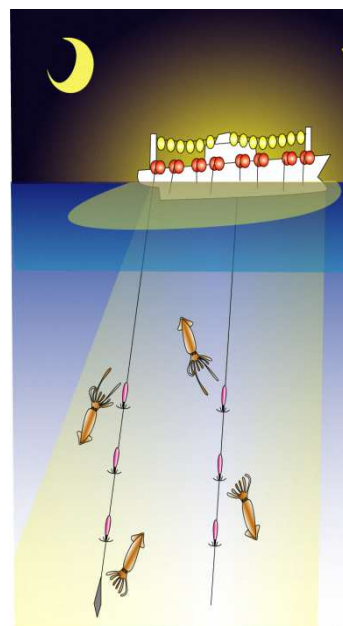
沿岸で日帰り操業する10トン未満漁船と、イカの回遊にあわせ日本海各地で操業する19トン型漁船があり、本県沿岸域でも夜間に陸から海を眺めると操業するイカ釣り漁船の灯り（漁り火）で幻想的な光景が見られます。

【魚種】 スルメイカ、ケンサキイカ（白いか）

【漁場】 10トン未満漁船→鳥取県沿岸

19トン型漁船（小型イカ釣り漁船）

→東シナ海及び日本海全域



## 現状の課題と解決に向けた取り組み

イカ釣り漁業は、大きな集魚灯を利用して操業しているため、他の漁業より燃油を多く必要とし、燃油価格の高騰が漁業経営を圧迫しています。また、近年、漁場が沖合域に形成される傾向にあり、沿岸域に漁場が形成されにくくなっています。

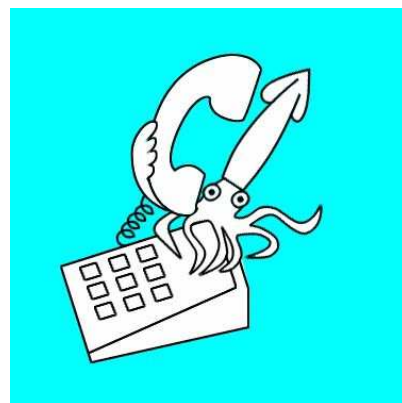
鳥取県では燃油高騰対策として、スルメイカが山陰沖を北上する春と南下する秋～冬に第一鳥取丸を用いてスルメイカの漁場探査調査を実施しています。そして、調査結果を、速やかに漁協にFAX送信することで操業の効率化を図っています。

## 電話で情報をゲット！！

漁業者に他県の水揚げ状況を知って頂くために、電話応答専用の「白いか（ケンサキイカ）、しまめいか（スルメイカ）漁況案内」を行っています。白いかは、長崎県及び兵庫県の水揚げ状況をお知らせしています。しまめいかは、境漁港の水揚げ状況をお知らせしています。

## 電話番号

**0859-45-4505**

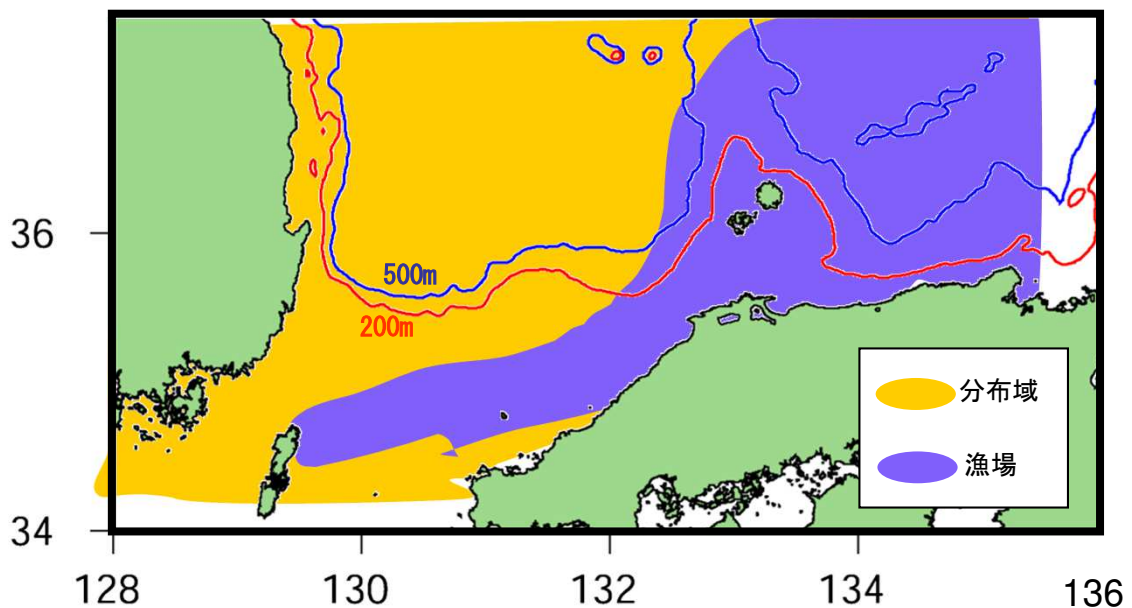


## スルメイカ (地方名 しまめいか)



## 生態

【分布】 日本周辺に広く分布しており、主に日本海側には秋生まれ群が太平洋側には冬生まれ群が来遊している。



【成長】 寿命は約1年で、大きいもので外套背長約30cmまで成長する。

【成熟】 雄は約9カ月、雌は約11カ月で成熟する。

系群	産卵期	産卵場	主漁期
秋季発生系群	前年10～12月	北陸沿岸～東シナ海	3～12月
冬季発生系群	前々年12～前年3月	主に東シナ海	1～2月

【食性】 動物プランクトンや、キュウリエソ等を食べる。

## 漁業の特徴

【漁法】 主にイカ釣りにより漁獲される。

【漁期】 日本海では1月～3月上旬は前年の冬に生まれ、主産卵場へと南下回遊するスルメイカ（冬季発生系群）が主に漁獲される。また、3月中旬以降は前年の秋頃に生まれ、日本海沿岸部を北上、10月以降に主産卵場へと南下回遊するスルメイカ（秋季発生系群）が漁獲される。



### 3 漁獲状況

鳥取県船（10トン未満漁船、19トン型漁船）の漁獲量はスルメイカが575トン（前年比86%）で漁獲金額は4.6億円（前年比92%）となりました。漁獲量、漁獲金額共に前年並みでした。

境港のスルメイカ水揚量は2002年まで高い水揚げが続いていましたが、近年は減少傾向に有り、ピーク時の1/10以下となっています。

2022年の境港における水揚量は141トン（前年比41%、平年比65%）で前年と平年を下回りました。月別の水揚げでは4月に前年と平年を上回る水揚げが認められましたが、それ以外の月は概ね低調に推移しました。

近年の低調傾向は日本海地区全体で認められ、回遊経路が漁獲好調期から変化したことなどが原因だと考えられます。また、産卵時期の変化を示唆する研究報告も認められており、今後、来遊時期や魚体のサイズが変化する可能性があります。

秋生まれ群

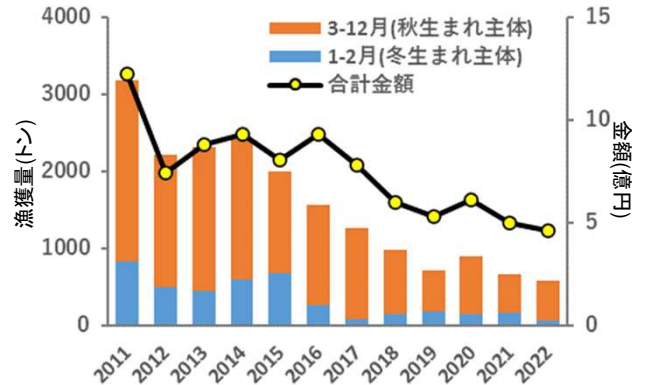


低位  
・横ばい

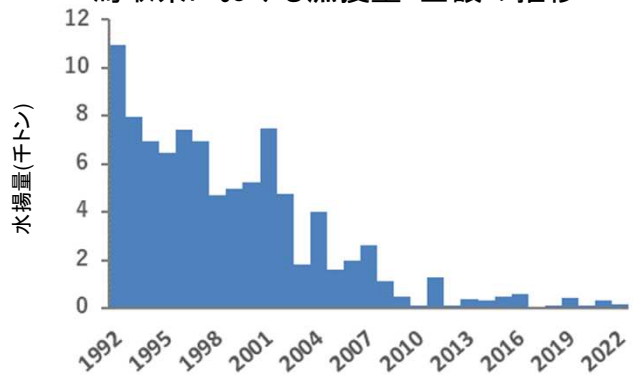
冬生まれ群



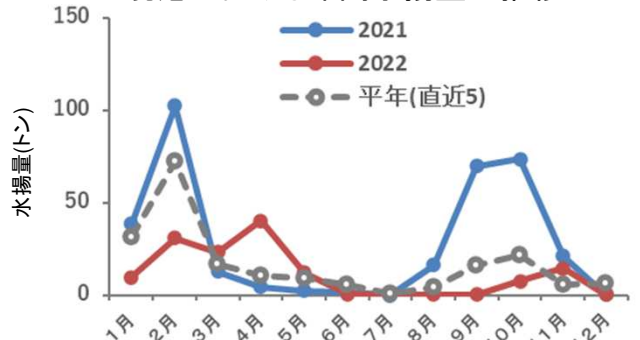
低位  
・横ばい



鳥取県における漁獲量・金額の推移



境港における年間水揚量の推移



境港における月別水揚量の比較

### 4 資源を大切に使うための調査や取り組み

イカ釣り漁業は燃油価格高騰の影響を強く受ける漁業です。また、上記に加え、スルメイカの資源量減少、漁場の沖合化によりイカ釣り漁業は非常に厳しい状況にあります。

鳥取県では燃油高騰対策として、スルメイカが山陰沖に来遊する春と秋に、第一鳥取丸を用いたスルメイカの漁場探査調査を実施しています。釣獲したスルメイカから、分布密度や大きさを調査し、結果を、速やかに漁業者の皆さんにお知らせし、情報活用してもらうことで操業の効率化を図っています。



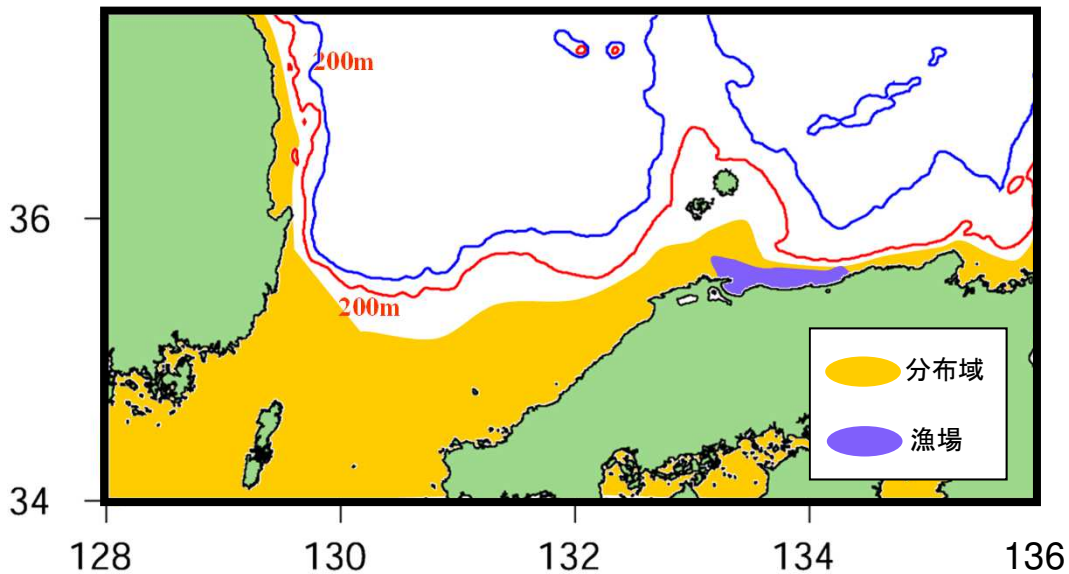
漁場探査調査中の測定風景

## ケンサキイカ・ブドウイカ (地方名 白いか)



### 生態

【分布】 青森県以南の本邦沿岸、韓国、東海、南海に分布している。



【成長】 寿命は約1年で、雌の最大外套背長は41cm、雄は50cmまで成長する。

【成熟】 外套背長7～8cm（月齢約5カ月）程度から成熟個体が出現し、外套背長20cm前後（月齢約8カ月）でほぼ半数が成熟する。

【食性】 小型の魚類、甲殻類、軟体類を食べる。

### 漁業の特徴

【漁法】 秋までは主に手釣り、それ以降イカ釣（機械釣）により漁獲される。

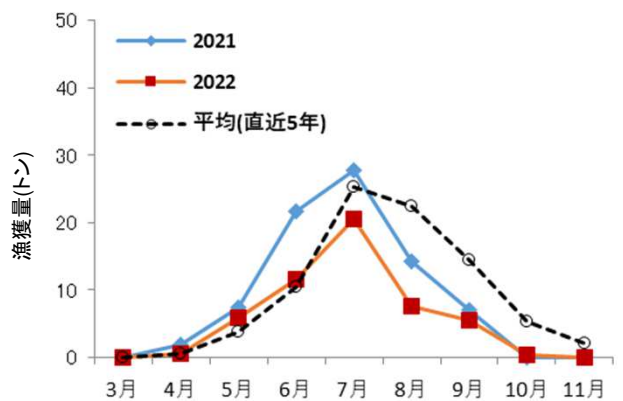
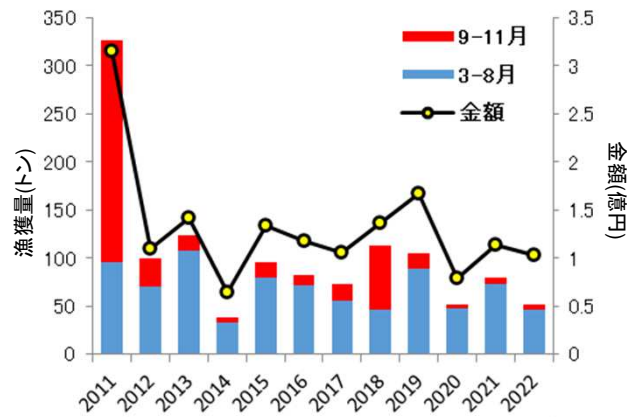
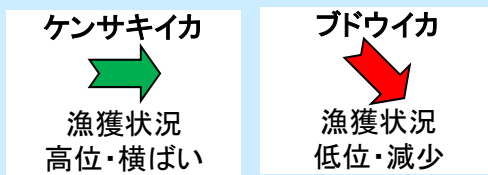
【漁期】 4、5月から漁獲が開始され、初期には沿岸寄りの水深20～40m付近に漁場が形成され、月を追って次第に沖合へと漁場が移り、秋には水深80～100mの海域が主漁場となる。

### 3 漁獲状況

2022年の3月から12月における鳥取県船（10トン未満漁船）のケンサキイカ漁獲量は52.2トン（前年比65.2%）、漁獲金額は1億円（前年比90.9%）となり、漁獲量、漁獲金額ともに前年を下回りました。

2022年の月別漁獲量は概ね前年を下回り低調に推移しました。2022年における漁獲の主体となったのは、主に夏季に漁獲されるケンサキイカだと考えられ、3月～8月の合計漁獲量は平年（直近5年）比74%でした。8月下旬以降に漁獲されるブドウイカ（ケンサキイカの季節型）は、前年に引き続き来遊量が少なかったと考えられ、9月～11月の合計漁獲量は平年比27%を示し、低調でした。

ブドウイカの不漁は、前年に引き続き隣県からも報告されており、2022年もブドウイカの資源状態が減少傾向にあると考えられます。



### 4 資源を大切に使うための調査や取り組み

ケンサキイカ（白イカ）は沿岸漁業の生産金額上位5種に入る重要魚種であります。近年、その漁獲量は減少傾向にあります。これまで水産試験場、栽培漁業センターと共同で、白イカの付加価値向上を目的に、活イカ出荷の技術開発、普及等を行ってきました。しかし、2014年の不漁を機に、県内の活イカを扱う飲食店は、山口県からの購入ルートを構築し、県産活イカの需要が低下しました。

そこで、イカ後進県の鳥取県を売り込み、新たな付加価値向上を図るため、新たな出荷方法によるブランド化を目指して、漁業者の協力のもと、イカの墨袋を除去する技術開発を行いました。2016年には、墨袋除去技術のマニュアル化と講習会等での技術指導を行い、技術普及を図るとともに、試験販売を行い、単価向上効果が確認されました。この結果から、ブランド化に資すると判断されたため、2017年から鳥取墨なし白イカ『白輝姫（しらきひめ）』の名称で販売が行われています。

